皇海

1977-1978 No.9

群馬大学工学部ワンダーフォーゲル部

巻　頭　言

昭和53年度部長　江　川　幸　和

部誌「皇海」９号を発行する。内容は昭和52・53年度２年間の工学部ワンゲルの活動記録であり、沢登り・岩登り・積雪期の記録も含まれている。これら山行の記録は今読み返しても、それぞれ面白い（？）ものだが、クラブの運営について振り返ってみると雑多な問題に取り組むことなく山積みした感がある（部誌の発行、…）。またクラブの方針・方向性を持たないまま合宿を消化しようとした計画性の無さが、52・53年度双方の夏合宿失敗という一因となってはいなかったか。今後は年間の目標を定めそれに基づいて前年度の安易なくり返しとならぬよう各合宿を計画してもらいたい。

現在、ワンゲル部員は三学部で100名を数える。部員が多ければ新たな試みも可能となるだろう。我々が今痛感しているのは下級生に対する指導の重大さである。現在の下級生が後輩を確実に指導出来るよう我々の知識を与えておこう。　せめて先輩達から受けた感動（ショック？）だけでも。

８号の巻頭言でも触れているように部員の気質はどんどん変化して行く。教育学部のコンパに顔を出してとまどっている工学部の古顔達、街ではアウトドアスポーツ、ヘビーデュティーなる言葉があふれる今日この頃、工学部ワンゲルはこの先どう歩むのだろうか。

ほっつき歩くに疲れたならば
眠ればよいのだ
山のふところにもぐり込んで
山に抱かれて眠ればよいのだ

―― 目　　次 ――

巻頭言……1
目　次……2
昭和52・53年度行動概略……3
昭和52年度合宿記録
　新人強化合宿：足尾（５月３日～５月５日）……3
　夏合宿：御神楽岳～中の岐山（７月17日～７月27日）……5
　秋合宿：白馬岳～鹿島槍ヶ岳（10月１日～10月６日）……8
　スキー合宿：野沢温泉（12月21日～12月24日）……10
　春スキー合宿：野反湖（３月24日～３月29日）……11
昭和53年度合宿記録
　新人強化合宿：足尾（５月５日～５月７日）……13
　夏合宿：神室山～栗駒山（７月20日～７月28日）……14
　〃　：柏峠～栗駒山（７月21日～７月31日）……16
　秋合宿：北ア（10月１日～10月７日）……19
　〃　：南ア（10月１日～10月７日）……20
　春スキー荷上げ（11月２日～11月３日）……22
　春スキー合宿：尾瀬（３月23日～３月29日）……24
昭和52・53年度個人山行記録……29
　巻機山（６月19日）……29
　八ヶ岳（８月29日～８月31日）……30
　谷川岳（10月23日）……31
　裏妙義（11月13日）……33
　白毛門～巻機山（３月２日～３月４日）…35
　谷川岳～平標山（６月４日）……36
　谷川岳～万太郎山（６月29日～６月30日)‥39
　足尾仁田元沢（８月９日～８月10日）……40
　白馬岳～針ノ木岳（８月20日～８月24日）41
　谷川南面ヒツゴー沢(９月３日～９月４日)44
　浅間山（12月９日～12月10日）……45
　上州武尊山（12月28日～12月30日）……47
　谷川岳～白毛門山（３月12日～３月14日)‥48
　谷川岳～平標山（６月26日）……29
　巻機山（10月23日）……31
　苗場山（10月23日）……32
　奥秩父（１月２日～１月４日）……33
　谷川岳（３月14日～３月17日）……35
　越後三山（６月10日～６月11日）……38
　谷川北面西ゼン（８月６日）……40
　剣岳（８月20日～８月26日）……43
　白毛門山（12月18日）……47
　その他の山行……49
　※三学部冬山規約……50
昭和52年以前の記録……51
部員住所録……56
ＯＢ住所録……58
編集後記……67

昭和52年・53年度行動概略

例年のように工学部新２年生は、春の平地合宿、また５月連休の足尾で強烈な洗礼を受ける。赤城新人合宿、新人強化合宿は三学部合同で盛大に行なわれた。５２年度夏合宿は50年の東北、51年の奥利根の中間とも言える奥只見「御神楽岳～浅草岳」が計画され、５月中旬に下見が行なわれた。しかし７月の荷上げ山行が集中豪雨のため入山出来ず、本合宿のコース短縮という形となった。

秋からは２年生が中心となり秋合宿、学園祭が無事終了した。春スキー合宿は数年続いた尾瀬から離れ野反湖で行なうことで11月に下見が行なわれ春に向けて計画は具体化されていった。また、52年12月の八ヶ岳山行については冬の平地合宿、三学部合同反省会で今後の冬山山行の在り方も含め討論され、積雪期の山行に関する規約が設けられた。（規約については後述）

53年度も前年同様、足尾新人合宿・三学部新人強化合宿が行なわれた。新たな試みとして４月下旬谷川岳マチガ沢に２年以上の三学部員を集め雪上訓練が催された。また前年、合宿との日程の都合で参加出来なかった赤城競歩に参加した。

53年度夏合宿は（部員の増加に伴い）２パーティに分け集中することが考えられ幾つかの候補山域から48、49年に計画された栗駒山集中と決定した。結果的に夏合宿では集中に失敗し、集中についてまたコース決定について教訓を残し秋合宿は２パーティが北ア・南アに分かれ行動した。

春スキー合宿は再び尾瀬に戻りメンバーの力に合った縦走形式を採ることになり、11月上旬に荷上げが行なわれた。

恒例の野沢温泉でのスキー合宿も民宿のご厚意により、52年12月、54年１月に無事行なわれた。

昭和52年度合宿記録

昭和52年度新人強化合宿

○袈裟丸～皇海山　（S 52年５月３日～５日）

Ｃ．Ｌ．木村博志（３Ｗ）　Ｓ．Ｌ．新里　均（３Ｅ）　野上達哉（３Ｃ）　瀧　裕徳（３Ｓ）　北川昌基（２Ｍ）　本多偉知朗（２Ｐ）　橋本　勇（２Ｌ）　大橋　忠（２Ｃ）　江川幸和（２Ｓ）　土山龍司（２Ｍ）

5月3日　晴れ

桐生駅 ▬▬ 沢入駅（8：15）── (10：30) 双輪塔 ── サイの河原 (12：00) ──（2：30)B_1

8時15分沢入駅を後にし、沢入小学校の裏から林道へはいる。道はしっかりしていて迷う心配はない。10時35分双輪塔に着く。ただし双輪塔は地図上より奥にある。ここには寝釈迦が彫られている。双輪塔を過ぎてからしばらく行くとコースもだんだん西よりになり、いよいよ最後の突き上げである。途中稜線に出るすこし手前に避難小屋があった。稜線に出ると、目の前に迫る赤城山が印象的である。稜線上を南にほんのすこし行った所に広々としたところがある。ここがサイの河原である。ここでかなり休んだ後、きょうのテン場予定地である袈裟丸手前の鞍部へと向う。テン場にはかなりいたんだ木造の避難小屋がある。きょうはこの小屋を利用させてもらうことにする。水場は小屋から南斜面に3分程度の所にある。

5月4日　くもり

B_1(5：50)──（6：30) 袈裟丸山頂── 奥袈裟 ──(12：00) 六林班 ──(3：02) 皇海山 ──(4：20)B_2

5時50分避難小屋を後にし、朝のワンピッチでいきなり袈裟丸の山頂をねらう。背に朝焼けを受けつつ少々急な登りを登り終えるころには、額にうっすらと汗がにじむ。山頂からは道もしっかりしており迷うこともない。奥袈裟を越えたあたりから雪がでてきたのでスパッツを着ける。北側斜面は雪もまだかなり多い。六林班で教育のパーティーにいきあう。パーワンできているらしい。もらった暖い紅茶がなんともうまかった。昨夜は袈裟丸の山頂をテン場にしたとのこと。そしてきょうは皇海の手前あたりをテン場にするらしい。我々のパーティーはきょう中に国境平に着かねばならないので、ここを先に出発する。鋸ぎり山を過ぎたあたりからの下りはかなり気をつけないと滑り落ちる危険性がある。わがパーティー内においてもHo氏が安易な気持ちでグリセードをしたところ、そのまま滑り落ちて行き途中Ha氏が飛びついたがなお止まらず二人一緒にすべり落ち、いち時はどうなるかと思ったが、どうにかこうにか木に引掛かって止まった。二人とも無事でホットし合ったところ、こんどは背中のザックに大なべを付けたTu氏が大なべと一緒にというよりは大なべに乗って仰向けになって滑り落ちてきた。そして木の密生している中でやっと引掛かって止まった。この時は足の骨でも折ったかと思ったが、けろっとした顔ではい出してきた。皇海手前の最低鞍部に2時5分着。どうにかテントが張れそうな広さだ。皇海の登りは倒木が多くやっかいな登りである。山頂ではガスっていてなにも見えない。皇海からの下りは、はじめ雪で道がはっきりせず少々迷いやすいがとにかく地図の方向の通り下っていくと途中から道もはっきりしてくる。4時20分国境平着。水場は西側に5分ほど下った所にある。ここは広々としていて大変良いテン場である。さらに感激したことには、鹿がテントのほんの2～3m近くまでよってくることである。テン場の良さにS氏が気をよくして少々酒を飲みすぎたようである。

5月5日　雨

$\mathfrak{B}_2$国境平――松木沢――間藤駅▬▬桐生駅

きょうは下りだけである。国境平から松木沢への道はしっかりしていて迷う心配はない。松木沢では膝ぐらいまで水につかるのはあらかじめ覚悟しといたほうがよさそうである。とにかく沢と雨で体が冷えた。駅についたらすぐ下着からすべて着がえた。　（本多記）

昭和52年度夏合宿（奥只見）

7月17日～7月27日

メンバー

C．L．：木村博志（3W）、S．L．：真鍋忠男（3C）、
食　糧　：大橋　忠（2C）、気　象　：本多偉知朗（2P）、
装　備　：江川幸和（2S）、医　療　：北川昌基（2M）、
会　計　：橋本　勇（2L）、村田　進（2M）、野上達哉（3C）、新里　均（3E）

○下見山行　5月14、15日

入山口の決定、荷上げ地の検討。

○荷上げ山行　7月13、14日

集中豪雨のため荷上げ出来ず、コースの短縮を余儀なくされた。

○本合宿　7月17日　桐生（22：30）▬▬

7月18日　○

▬▬（7：45）本名駅――三条――（12：00）林道終点$\mathfrak{B}_1$

乗り慣れたはずの夜行だが、夏合宿となるとまた気分も違うものだ。小出駅で1時間ほど始発列車を待った。差し入れの品を片手にぶらさげ、本名駅より林道終点まで歩く。数名が、八乙女滝付近まで明日の偵察に行った。

7月19日　◎→○

$\mathfrak{B}_1$（4：10）――（7：30）P 948――（8：20）清水平野営場（11：45）――（15：45）P 1082南直下$\mathfrak{B}_2$

本名御神楽への登山道を行く。県境と出会った時点で西に伸びる尾根に踏み込む計画だが、この分岐がわかりにくい。最初、分岐を通り過ぎてからヤブに入ったのでリングワンデリングをしてしまい、元の野営場に出た。どうも、この野営場が県境との分岐らしい。雨も強くなり、ここにテントを張ろうという意見も出たが、C．L．の迫力でさらに1．5km先に進み、P 1082を過ぎた所になんとか2つテントを張った。水は東側の沢へ下れば得られるが水量は少ない。

7月20日　●

朝起きてもまだ雨は降っているので、またシュラフにもぐり込んだ。昼前あまりにヒマなので、トランプを2つのテントで分け、26枚で大貧民を始めた。

7月21日　○

$\mathcal{B}_{2\cdot3}$ 4：00)――(10：00) 日尊の倉山 (11：15)――(13：00) 1180m 付近 $\mathcal{B}_4$

テン場から500m 程行くと、踏跡が出てくるが、1km程で無くなる。日尊の倉山の最後の150m の急登は苦蒸して、どこを登ろうが同じようなものだ。日尊の倉山の三角点は確認出来なかったが最高点にプレートを付ける。他の大学のプレートも見当たらなかった。日尊の倉の下りの高い笹ヤブを抜け切った所を天場とした。新潟県側に5分下ると水が得られる。

7月22日　◑

$\mathcal{B}_4$ (4：30)――(8：50) 貉ヶ森山 (9：30)――(15：00) 雲河曽根を下った鞍部 $\mathcal{B}_5$

20m 余りのピークを越えると、いきなり立派な道と出会った。しかし喜んだのもつかの間、無人の雨量観測所が現われ道も無くなる。結局道は1kmぐらいか。再びヤブに踏み入り、貉ヶ森を目指す。手前のピークから、ヤブも濃く長く感じられた。三角点だけの山頂に我々のプレートを取り付ける。貉ヶ森山の下りに6天2張り出来る場所があるが、まだ10時半なので先に進む。あん部から雲河曽根の肩までのヤブがモーレツであった。肩から先は天場を捜しながら歩き稜線上のくぼ地に2張りした。水がなかなか得られず、北側のくぼ地から流れているのを用いたが少し濁っていた。

7月23日　◑

$\mathcal{B}_5$ (4：55)――(8：40) P 1094――(13：45) 東岐山手前の鞍部 $\mathcal{B}_6$

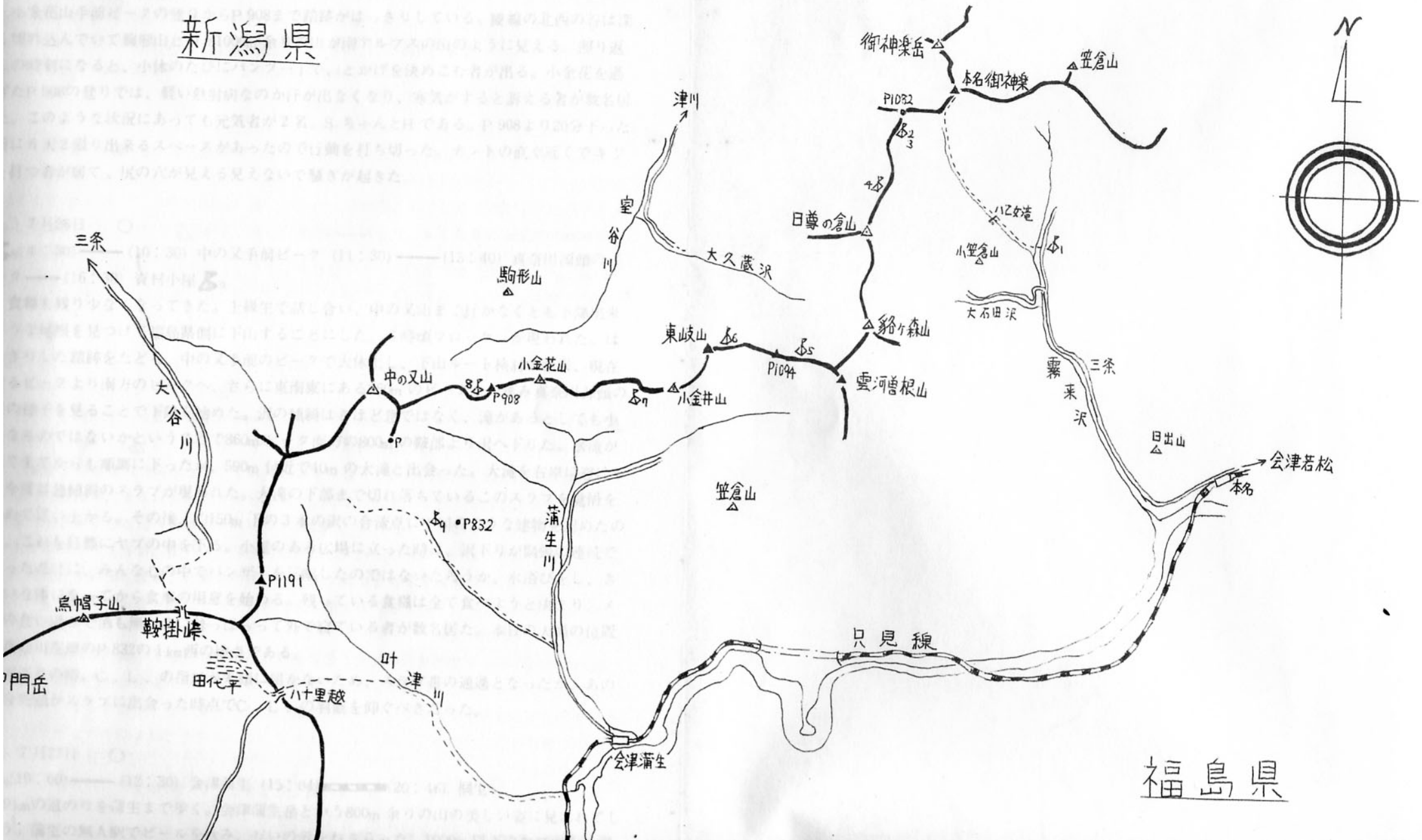
P 1094までの細い尾根は快調に進めたが、次の広いピークは背の高いしの竹のヤブとなり、下る時左により過ぎ、方向を誤まったので登り直した。屈曲部から、すぐ下の林道に作業に来ている人達の車が見下ろせる。大久蔵沢に林道が伸びてきているようだ。ちょうど昼メシ時で、ラジオの音まで聞こえてくる。気を取り直してもう一つピークを越えて今日の行動を打ち切った。水場は南の沢に7分下る。

7月24日　◑→●二

$\mathcal{B}_6$ (4：50)――(5：40) 東岐山――(9：05) 小金井山 (9：50)――(13：05) 小金井山の1km先 $\mathcal{B}_7$

東岐山からの下りはやせ尾根となる。そろそろ岩稜帯の始まりだろうか、視界もよくなる。小金井山でプレートを付けた。岩稜帯はヤブと較べはるかに歩きよいが、照り返しがものすごい。みんなヒー、ヒー、言っているので時間は早いがテントを張った。木陰で昼

S52年度 夏合宿 ―概念図―



寝、つくろい物。もうれつな夕立があった。

7月25日　○

$\mathfrak{B}_7$(4：20)――(8：25) 小金花手前ピーク――(10：20) 小金花山 (11：03)――(13：40) P 908の先の鞍部$\mathfrak{B}_8$

小金花山手前ピークの登りからP 908まで踏跡がはっきりしている。稜線の北西の谷は深く切れ込んでいて駒形山という1000m 余りの山が南アルプスの山のように見える。照り返しの時刻になると、小休のたびにパンツ一丁で、とかげを決めこむ者が出る。小金花を過ぎたP 908の登りでは、軽い熱射病なのか汗が出なくなり、寒気がすると訴える者が数名居た。このような状況にあっても元気者が2名。S ちゃんとH である。P 908より20分下った所に6天2張り出来るスペースがあったので行動を打ち切った。テントの直ぐ近くでキジを打つ者が居て、尻の穴が見える見えないで騒ぎが起きた。

7月26日　○

$\mathfrak{B}_8$(4：30)――(10：30) 中の又手前ピーク (11：30)――(13：40) 真奈川源頭のピーク――(16：30) 資材小屋$\mathfrak{B}_9$

食糧も残り少なくなってきた。上級生で話し合い、中の又山まで行かなくとも下降出来そうな尾根を見つけて福島県側に下山することにした。6時頃ブロッケンが現われた。はっきりした踏跡をたどる。中の又手前のピークで大休止し、下山ルート検討の結果、現在居るピークより南方のピークへ、さらに東南東にある860m のピークまで進み真奈川源頭の沢の様子を見ることで下降を始めた。沢の傾斜はさほど急ではなく、滝があるとしても小さなものではないかということで860m ピーク南方の800m の鞍部より沢へ下りた。水流が出て来てからも順調に下ったが、590m 付近で40m の大滝と出会った。大滝を右岸に避けると今度は急傾斜のスラブが現われた。大滝の下部まで切れ落ちているこのスラブを覚悟を決めて這い上がる。その後、約150m 下の3本の沢の合流点に小屋のような建物を認めたので、これを目標にヤブの中を下る。小屋のある広場に立った時は、沢下りが緊張の連続であっただけに、みんな心の中でバンザイを三唱したのではないだろうか。水浴びをし、きれいな体になってから食事の用意を始める。残っている食糧は全て食べようと決まり、メシの食い過ぎで酒も無いのに酔っぱらって外で寝ている者が数名居た。本日の天場の位置は真奈川左岸のP 832の1km西の地点である。

沢下りの時、C．L．の指示が先頭に届かないため、スラブ帯の通過となったが、あの場合先頭がスラブに出会った時点でC．L．の判断を仰ぐべきだった。

7月27日　○

$\mathfrak{B}_9$(10：00)――(12：30) 会津蒲生 (15：04)▬▬▬(20：46) 桐生

9kmの道のりを蒲生まで歩く。会津蒲生岳という800m 余りの山の美しい姿に見ほれてしまう。蒲生の無人駅でビールを飲み、互いの労をねぎらった。1000m 以下のヤブ山を、幾

つか乗り越えて来ただけであるが、充実した10日間であった。

〈反省〉　エスケープルートは、未知の沢であってはならない。これからの教訓となって欲しい。（江川記）

秋合宿（白馬岳～鹿島槍ヶ岳）

日程：昭和５２年１０月１日～６日

メンバー：Ｃ．Ｌ：橋本、Ｓ．Ｌ：北川、

医療：木村、写真：瀧、食糧：江川、気象：本多、装備：大橋、会計：村田、

１０月１日 ①

桐生▬▬白馬═══猿倉荘（４：２５）――白馬尻（５：１４）$\mathfrak{S}_1$

日射しが暑い位だ。駅の近くの売店では貸アイゼン１００円也。入山届けの時、ハンフに緊急連絡先がないのに気づいた。一路タクシーで。晴。山に雲あり　やや快調な出足だろう。小屋の人によると、昨日まで天気は悪かったそうである。食後の大貧民が始まる。

１０月２日 ①

$\mathfrak{S}_1$（６：００）――（６：５０）雪渓（７：５０）――（１０：２４）頂上宿舎　（１２：５０）――（１：２０）白馬岳山頂（２：１３）――（２：２７）$\mathfrak{S}_2$

４時起床、飯失敗。日の出５時４６分。下界は雲の下である。雪渓にかかると早速Ｃ．Ｌと木村さんを除いてアイゼンをつける。Ｃ．Ｌはピッケルがあったが、Ｋ氏は重いからと持ってこなかった。はたして、秋の雪渓にはクレバスが現われた。深さ５～６ｍ、幅１ｍ、ほかにも幾つかあり、おかげで二人は時々びびっていた。雪渓は岩室あたりまであり、ぎりぎりまで行くと、先がストンと切れていたので雪渓を降りて休憩。と何と雪渓は薄いふちを残して高さ５ｍうす暗く奥の方まで大穴があいていて、他の登山者が同じ様に上から下をのぞいていた。

昼めしの時Ｃ．Ｌが突然明日の行程もこなそうと言いだす天気。白馬山荘へ荷上げのヘリコプターがうるさい。下の雲がまた少しあがってきた。テントを張る。白馬山頂では、まわりを流れる雲の中で、ブロッケンや切れ間の向こうを見ていつ時をすごす。

淡い夕焼けの空、雲はさらに薄く高く上がっている。その下では８時すぎまで大貧民をやっている。

その夜は満天の星空であった。流れ星の数えっこをしていたのは誰だったか。

10月 3日 ①→●

$\mathfrak{S}_2$(7：30)――(10：05) 鑓ヶ岳 (10：30)――(11：30) 天狗山荘$\mathfrak{S}_3$

5時起床。よく冷えこみ、風が少しある。薄い空の雲と雲海の間を行く。途中、写真を撮ったり、コーヒーを沸かしたり、それからM君は初めての秋合宿なのでよくからかった。鑓ヶ岳下りのガレ場にくると、「村田よ、夕食は石板焼肉だから、適当な石の板をもってかなくちゃだめなんだよね。これなんか、いいね。」ひきつりながらもとぼけきったM君に対し、E氏は本当に5×25×50cm位の岩板をキスリングにくくりつけて持ってきたのだった。

10月 4日 ●　沈デン $\mathfrak{S}_{3\cdot4}$

夜中に雨が強く降り出してきた。1時頃、C．L が外で溝を堀っている。4時起床。6時半まで様子を見て、沈デン決定、即トランプ。8時頃、眼下も雨雲が切れてきた。このあたりは鋭いガレ場になっていて、落とし紙がまた吹き上げられてくる程急な所である。

4時頃晴れ間が見えてくる。このままトランプをやっていると、今日は大貧民だけを11時間することになる。テント内では相変わらず注意が足りない。

10月 5日 ①

$\mathfrak{S}_4$(5：45)――(8：35) 不帰剣 (8：50)――(9：35)唐松岳 (10：30)――(1：27) 五竜山荘$\mathfrak{S}_5$

夜寒くて目がさめる。風が時々強く吹く。4時起床。エスパースの内側が凍っている。残り少ない外のホリタンの水も凍っていた。まさか！とC．LとS．Lが目をあわせたが、すでに遅く、水場の水も凍ってカチンカチンになっていたのでした。今日も淡く焼けた陽射しの中を出発すると、まもなく雷鳥に会う。胸と尾の先は色変わりをしていて、風に小さくそよぐその白い毛は冬の遠くないことを知らせていた。

天狗の大下りを無事に過ぎ、不帰険で一休み。この時、休んでいた大岩がグラリと揺れる。地震か。唐松岳から、行手をみると、雲海が尾根を越えて反対側へ流れこんでいるのが唯一の景味で、ここは日陰を捜す程日射しが暑い。

白山を越えるとすぐ五竜山荘である。水場まで30分。水くみが帰ってきたときは、完全にガスに包まれた。8時頃大貧民も終わって外を見ると、星がきれいである。その晩は明るい半月夜だった。

10月 6日

$\mathfrak{S}_5$(5：35)――(6：20) 五竜岳 (6：30)――(9：30) キレット小屋 (10：05)――(11：52) 鹿島槍ヶ岳――(2：25) 冷池山荘$\mathfrak{S}_6$

3時50分起床。テント内の仕事は遅い。五竜岳は真のピークが立入禁止となっていた山頂部は白馬から鹿島槍まで後立山全景が見渡せ、南アルプス、富士山まで遠望できる。

雲海の向こう岸に四阿、浅間も見える。ここからC．Lは大いに地図を読み誤り、格好のエサにされながら、まさにキレットにはさまっているようなキレット小屋に着く。

今、登り半分。風が吹き涼しい。鹿島槍の東南面から雲が流れている。雲海はなく、遠くはかすんでいる。日射しは暑い。鹿島槍のピークから黒四ダムの建物が少し見える。信州側から上がってくる雲が、富山側から吹いてくる風に稜線であおられて、渦を巻いている。天高い雲はすぐ上に見える。対面にかすむ剣岳に雲がゆっくりとかぶり始めている。T氏はもう熟睡している。

10月17日　◎

$\mathcal{B}_6$(6：00)――(6：50)高千穂平――(8：18)西股出合(8：48)――

4時起床。夜はあまり寒くなかった。強い風時々ガス。樹々の中をひたすら降りて1時間、ここまでくると、雲は高く、風は弱い。まだ、下にも雲が厚く見える。西股出合に出ると、頭上は曇り空、一路鹿島へ向かう。……あまりに長い歩きで、ついたうれしさのあまり、以下記録を忘れてしまった。が、大貧民だけはよくやったのを覚えている。（北川記）

冬スキー合宿（野沢温泉）

S．52年12月21日～24日

C．L．野上、S．L．本多、村田（装備）、喜古（会計）、江川、新里、木村、橋本、北川

12月21日　雪

つい3日前まで野沢の積雪0。ほとんど今回の合宿をあきらめかけていたところ、前日あたりからの冬型の気圧配置により野沢方面にもかなりの降雪。いっきに明るい見通しがついた。当日桐生7時8分の電車に乗り遅れ、正午ごろ野沢着の予定が午後3時ごろになってしまった。あらかじめ連絡をとってあった民宿「ふもと」の畑にテントを張らせてもらったが、前日からの新雪に悪戦苦闘。ついにこの日はスキーを履くことはなかった。

12月22日　くもり時々雪

いよいよ朝9時にゲレンデへ。時おり雪のパラつく中で1年間のブランクをとりもどそうと各自思い思いに滑り始めた。ゲレンデは前日からリフトが運転され始めたとかで、かなりすいていて、みんな一日で勘を取りもどしたようである。

12月23日　晴れ

テントから出ると朝日がまぶしい。きょうは最初から、日本一長いというリフトを使って上の平のスキー場へ向う。途中北アルプスの山々も見え、なんとも気持ちのいい日である。

上の平スキー場もやはりすいていてリフトは並ばずに乗れる。みんな一日券のもとを取りもどすまではほとんど休まずに滑り続けた。結局この日は余裕で2日分はリフトに乗った。

12月24日　晴れ

午前中に民宿の畑を後にした。今回の合宿でまったくの初心者もいたがなんとか春スキー合宿のめどもついたように思われた。　　記：本多

春スキー合宿（野反湖周辺）

S．53年3月24日～3月29日

C．L．木村、S．L．江川、野上、新里、橋本、本多、北川、村田、喜古、太田、中村

3月24日　①－

桐生（6：33）▬▬（8：50）長野原（8：55）═（10：00）花敷温泉（10：30）→（11：00）白砂林道分岐（11：15）→（12：00）P 1502→（12：30）→（15：10）野反湖ヒュッテ

OG加藤さんの見送りを受け、我々は一路野反湖へ向った。花敷温泉に着くと、トラックと依頼した野反湖ヒュッテの中村さんが、待っていた。途中、非常時に備えて、白砂ダムにあいさつをしていった。雪は白砂林道分岐付近で30cm程度あり、これ以上はトラックではいけなかった。トラックを降りた後、しばらくは登山靴でも歩けたが、P 1502付近になると雪に足を取られるようになったので、スキーをつける様にした。山スキーによる歩行は、始めての者が多く、進行は、はかどらない。野反湖に近づくにつれ天候は悪化し、雪、風が強くなった。一時は視界がきかなくなったが、ポールがヒュッテまで案内してくれた。ヒュッテには、我々と一緒に出発した中村さんと、今朝、早く花敷を出発した千葉大のワンゲルがおり、我々に紅茶を御馳走してくれた。疲れていた我々にはとてもありがたかった。体が暖まつた後、予定を変更し、ヒュッテ前にテントを張った。

3月25日　◎

今日は、トレーニングの意味で、午前中に弁天山才一ピーク、午後より、八間山から南に伸びる尾根の肩まで行った。弁天山才一ピークでの滑降で、E氏が、ねん座してしまった。また、肩付近では、NとKが2m程のクレバスに落ちてしまったが、自力で脱出出来た。

3月26日　①風なし

起床（5：00）（8：10）→（8：50）弁天山才一ピーク（8：30）→（9：15）才二ピーク（9：20）→（10：30）エビ山（10：45）→（12：30）

天幕から出てみると、今日は絶好のツァー日和となり、すがすがしい気分でスキーを付けた。人数の都合でメンバーを２つに分けて出発した。NとHは、ゲレンデスキーのため、スキーを１つにまとめ、「犬の散歩だ。」とひょうきんな事を言いながら、ひもにつけて引いていった。弁天山才一ピークまでは軽快にピッチを上げた。登るにつれ展望は開け、南に噴煙を上げる浅間山、北には八間の奥に白砂山がひっそり立っている。

才一ピークから才三ピークまでは木が多く、さらに小さな起伏があって進みにくい。才三ピークからはエビ山を目指して、いよいよ滑降である。下り始めは傾斜がきつく、斜滑降とキックターンを繰り返し、自信のある傾斜になると思い思いに滑って、エビ山の取り付きまでいった。エビ山は、中腹までは直登できる。頂上で昼食を取り、木の少ない南面から滑り出し、斜面を回る様にして、エビ山の東側に出、野反湖を通って天場に戻った。

３月27日　◎風強し

沈殿。吹き溜りに雪洞をつくる。

３月28日　○無風

起床（５：00）⛷（８：45）→（９：20）八間山の肩（９：25）→（10：30）八間山頂上（11：00）→（13：00）⛷

天場から林道に出て、八間山の西側まで行く。林道はわずかに下り坂になっているので、楽である。取り付き付近は斜面もゆるやかで、木も少なく、スキーで登れる。肩付近は斜面が急になり、また、木も多いためスキーをかついだ。肩の上部は雪が豊富であるが、頂上付近になると尾根が細くなったので、途中スキーをデポした。頂上には小屋があったが、屋根だけがわずかに雪上に現われていた。

山頂での天望は、味気のない我々の食事を美味にした。昼食後、デポ地から木のない南面を斜滑降で滑り出し、斜面を右に巻いて肩までいく。それ以後は、ヤブに四苦八苦しながら林道にたどり着いた。

夜半より暴風が吹き、ジャンボエスパスのポールは折れ、４人用の方は、風で舞った鉄板が当って、一部がさけた。

３月29日　◎→◐

起床（５：30）⛷（７：20）→（８：10）白砂林道分岐（８：15）→（10：20）花敷温泉

起きると昨晩以来の暴風が以前やまず、さらに、天幕が大破しているので、朝食を取らずに出発した。初日にねん座したE氏も、回復して、みなと一緒に元気よく下った。

（橋本記）

５３年度　新人強化合宿

山域　庚申山－皇海山－国境平

日程　５月５日～７日

メンバー：本多（Ｃ．Ｌ．）、大橋（Ｓ．Ｌ．）、喜古（医療）、野上、太田（装備）、江川、井瀬（装備）、飯島（会計・気象）

５月５日

桐生（６：35）▬▬原向（８：20）――（９：20）銀山平登山口（９：30）――（10：32）水面沢入口（11：30）――（12：40）庚申山荘 ▲1

原向の駅を降り、重いザックを背負って歩き出した。回りの天気は快晴であった。このせいか足取り軽く、新緑の中を早く山荘に着いた。

５月６日

山荘（６：25）――（７：55）庚申山頂（８：25）――（10：05）白山下（10：50）（11：20）銀山（11：40）――（13：00）皇海山（13：40）――（15：10）国境平 ▲2

４：10起床。眠い顔をしながら朝食をすませ、朝霞の中を庚申山頂に立つ。山頂には雪が残っていた。景色は晴れていないためか遠望できない。白山下で昼食をとる。皇海山の登りはきつい。皇海山頂に立つと、そこは２０００ｍ級の山にもかかわらず大木の森という感じであり、ここからの遠望は谷川などが見え素晴らしかった。下りは北斜面となるためスパッツを必要とした。やがて国境平に着。

５月７日

国境平（６：30）

（７：15）松木沢（７：30）　（10：00）ダム（10：45）　（12：50）間藤

４：00起床、今朝は３時頃より小雨が降り続き、沢の増水を心配させた。朝食を終えテントをたたみ１ピッチで松木沢へ。松木沢は両岸の切り立った沢であり、濡れずに下ることは不可能と思われる。事実、全員がびしょ濡れである。10時頃、井瀬が手に負傷した。他は異常なし。ダムが見えてきた。この辺から雨が強くなる。雨宿りを兼ね工事小屋に入り昼食をとる。雨は降り続いたが、ここから平担な道なので間藤へと向う。

※同じコースをもう一隊も同行した。

北川（Ｃ．Ｌ．）、村田（Ｓ．Ｌ．）、橋本、井上、古川、

昭和53年度夏合宿（東北）

第１パーティー（神室山～栗駒山）

Ｃ．Ｌ．　江川幸和（３Ｓ）、Ｓ．Ｌ．　北川昌基（３Ｍ）、記録　大橋　忠（３Ｃ）、医療　中村雅秋（２Ｐ）、食料　古川孝司（２Ｗ）、装備　井瀬　純（２Ｃ）、会計・気象　根岸和美（２Ｌ）

○荷上げ　７月11・12日　　鬼首峠

○本合宿　７月20日　桐生（22：10）

７月21日　　◎→①

（７：20）新庄（８：29）地境　　（９：35）落合橋――（11：45）沢から離れる――（14：40）稜線――（15：30）神室山 $\mathcal{B}_1$

地境までバスで入る。落合橋に神室山への指導標有り。尾根に取り付くまでは非常に速いペースであったが、県境の稜線が近くなってから、足がつる者１名有りペースが落ちた。神室山避難小屋は頂上より１分で、二階建のきれいな小屋であった。水場への標識有り。

７月22日　　◎

$\mathcal{B}_1$（４：30）――（６：35）Ｐ1158――（12：45）Ｐ1115.6――（14：00）Ｐ1115.6と先のピークの間 $\mathcal{B}_2$

火打岳への登山道を右手に見送り、鬼首峠までは人に会うことも無いであろうヤブに入る。Ｐ1158まで、しゃくなげも有りペースは遅い。Ｐ1158の次のピークからは、比較的歩きやすいが、Ｐ1115.6より尾根が広くなりヤブもひどい。沢の源頭のちょっとした台地を広げてなんとかテントを張った。６人用に７人なので、少々きゅうくつであった。水は源頭より４分。Ｐ1115.6の三角点は確認出来た。

７月23日　　◎→①

$\mathcal{B}_2$（４：15）――（８：00）Ｐ1153（８：30）――（11：35）軍沢岳――県境分岐100m下（15：40）$\mathcal{B}_3$

Ｐ1153までは稜線より少し北側が楽である。この間、水の入っているポリタンを拾った。今日は笹ヤブのせいか、又ヤブに体が慣れたせいか、ペースが速い。軍沢岳頂上は、だだっ広く三角点を探すのに時間がかかったが、用意してきたプレートを付け、73年度のプレートと本年度のプレートをバックに記念撮影した。軍沢の下りは先頭が左右に寄りすぎ、案外時間がかかってしまった。さて問題の県境分岐である。分岐の手前のガレ場の上に出たので、南へ進んだが行き過ぎて、Ｐ1107手前の鞍部まで下ってしまった。10分位登り直してから東に向かって下降を始めたが、沢の急斜面となったため、南へトラバースした。尾根がはっきりしないため、１名を空身で下降させ、確認の後全員下降した。天場は沢の源頭のすぐ横であり、水場へは１分である。今日からツェルトで１名寝ることにした。

7月24日　○

B_3(4：15)――(5：45) 県境屈曲部の鞍部――(9：15) 鉄塔――(10：00) 鬼首峠(荷上げ地) B_4

高木の下なのでヤブが薄く、非常に歩きやすい。途中、目にゴミが入り痛がる者1名。送電線の鉄塔が近くなってから突然、鈴竹の密生したヤブとなるが、目の前に林道が見えているので全員必死に林道に這い上がる。この林道は峠よりP 868.9を巻いて鉄塔まで来ているものである。峠で荷上げ品の確認の後、水浴び、ビールｅｔｃ。水場は車道を15分秋田県側に下った所。車を見たせいか、ここよりヒッチハイクで帰ろうと冗談を言っていた。

7月25日　○

B_4(4：25)――(7：00) P 957手前の鞍部――(11：00) P 1087.9とP 1086の間 B_5

踏跡が少し続きペースも速いが、すぐそれも無くなる。73年の記録のとおり、この辺りは地形がはっきりしない。車道が近いためか今日は標柱がよく目に付く。P 957から、これから歩く稜線がよく望まれる。ここから進路を北に取る。P 1087.9の登りにガレ場が、一ヶ所有り緊張させられる。この登りでは120m 位登った辺りで見当をつけ進路を南東に変えて下降にかかった。P 1086の手前鞍部で天場を捜し、今日の行動を打ち切った。水場は南西に7分下る。

7月26日　○

B_5(4：25)――(6：00) P 1097――(9：25) 分岐手前の肩――(11：40) 分岐――(15：20) 虎毛山避難小屋 B_6

ヤブが薄いため、P 1097まで快調に進んだ。次の鞍部には天場の跡があり、ここから鈴竹の密生したヤブとなり極端にペースが落ちた。分岐手前の肩より南面のガレ場のすぐ上を歩いたので少しは速くなったが、それとて急な斜面を横切るため右足が痛くなってしまった。Ｃ．Ｌ．の独断で虎毛山ピストンが決定し、虎毛へ進路をとるが、しゃくなげの猛烈なヤブであった。虎毛山頂から南に伸びている道に出会うのを期待し、なおも進む。途中東側の斜面の草原で一息入れる。3日前から破れ始めていたＩ君のズボンは、ここに来て布地は無いに等しく、痛々しい。山頂の小屋は見えるのだが、しゃくなげのため時間のわりにさっぱり進まない。池塘が在ると思われる所で道を探すが、それらしきものは見当らず、大休止を取った後、さらに1時間しゃくなげの中を泳ぎ、やっとこ虎毛小屋に着いた。少し休んだ後3人が水くみに向かったが、久しぶりに出会った登山道から離れられなかったのか、赤倉沢との出合まで下りてしまい帰ったのは、すっかり暗い8時近くであった。夕食後、明日は赤倉沢に下山すると全員に発表した。当初の計画になかった虎毛山ピストンを決行したことで、先の縦走は不可能となったのである。

7月27日　○

B_6(11：00)――(12：15) 赤倉沢出合――(13：40) 赤倉橋下 B_7

7時に起床し、山頂のベンチで朝食を摂った。まさに天上の楽園である。湿原が東に延び、美しい池塘がある。昨日のしゃくなげ帯がうそのようである。5万分の1の地図にある池塘と登山道の位置は誤まりであろう。何日でも滞在したい虎毛山であるが11時に別れを告げ下山を始めた。足が痛くなる丸太の階段が延々と続く。指導標によると虎毛山から高松岳への縦走路は整備されているようだ。赤倉橋の下で水浴びをした。

7月28日　◎

$\mathcal{B}_7$(5：05)――(7：35) 秋の宮温泉 (11：45)═══(12：35) 横掘駅 (13：07)▭▭ (20：30) 小山 ▭▭(21：35) 桐生

4時30分に出発出来る状態だったが、ここから鬼首峠を越え車道を歩いて栗駒山に向かうのは無理ではないかと、話し合った結果、秋の宮温泉経由で下山することに決定した。2時間車道を歩いたが、靴づれが出来てびっこをひく者、靴のカカトを無くした者も居て、また脱力感のためか歩き方がおかしかったようだ。バス停でビールを飲んでから旅館の温泉に入れてもらった。　(江川記)

第2パーティー (柏峠～栗駒山)

S．53年7月21日～31日

C．L．　橋本　勇（3L）、S．L．　本多偉知朗（3P）、医療　太田　稔（2J）、記録　村田　進（2M）、食料　飯島宏幸（2W）、会計　井上裕治（2M）、装備　田中和彦（2M）、黒沢　浩（2S）

7月21日　桐生 (22：32)▭▭ 小山　7月22日（1：09)▭▭ 福島（6：30)▭▭ 十文字駅 (13：08)═══(14：05) 間木――(15：00)$\mathcal{B}_1$

十文字駅からタクシーで間木まで行く。間木から明通沢に沿って道を進む。明日からのヤブ漕ぎを考え、早めに天場を捜した。
天場は平坦ではあったが、だいぶ草がはえていた。

7月23日　◐ $\mathcal{B}_{1.2}$

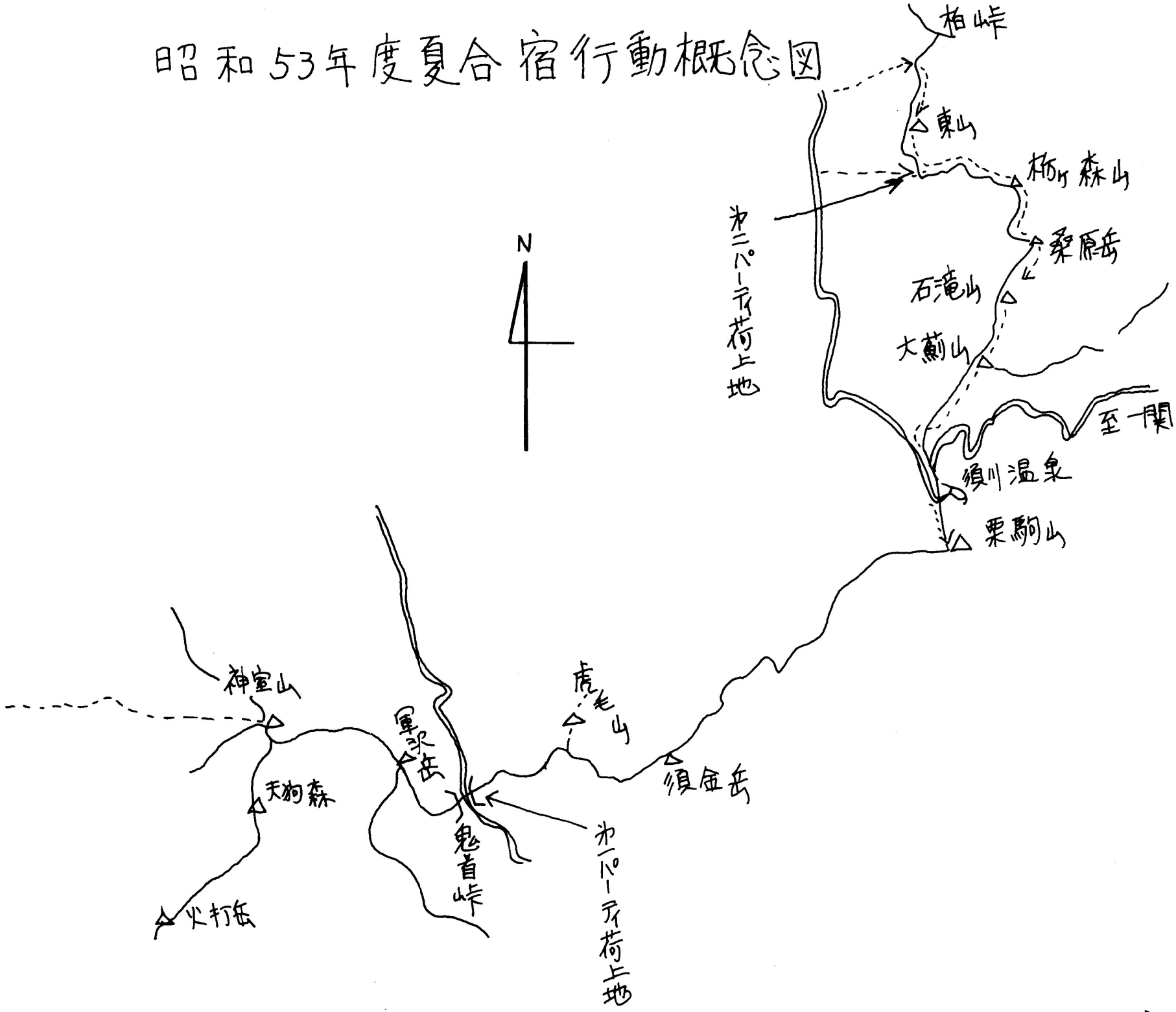
朝、思わぬ事故が起きた。朝食を作っている際にKが、コッフェルを倒して足にやけどをしてしまったのだ。そのため、出発を遅らせて様子を見たが、火ぶくれが出来ており、これからの行程を考え、大事をとって下山させた。S.L.がバス停まで送っていくため、沈殿とした。

7月24日　◐

$\mathcal{B}_{1.2}$(4：20)――(5：00) 二俣――(5：50) P 740 (6：00)――(7：30) 県境嶺線 (7：40)――(9：20) P 942の先 (9：50)――(10：30) P 840 (11：45)――(13：05)$\mathcal{B}_3$

2晩を過した天場を後にして道を進む。明通沢の二俣までは、しっかりした通がついている。二俣から尾根に取り付く。尾根には道がついており、斜面はきついが、ピッチは上る。

昭和53年度夏合宿行動概念図



しかし、この道が災をもたらした。道は尾根の北斜面を県境に平行して通っているため、県境が直角に曲る箇所を通り過ぎてしまったのである。そのため、少しもどって県境稜線につき上げた。県境稜線は、背丈以上の笹ヤブである。南方のP 942を目差して進んだ。P 942から西に進む、ここからはヤブが非常に濃くなったが、細尾根であるので間違うことはない。このころになると暑さと強烈なヤブでピッチは下がる。P 890付近になるとヤブは薄くなったが、それもつかの間で、南に進む様になると、東西に伸びる細い尾根状のピークが、現われ、これを越すのに非常なアルバイトを要した。天場は、このピークを越した所を切り開いて、作った。水は、稜線の東側へ下り20分である

7月25日　Ⓓ

$\mathfrak{B}_3$(4：20)――(5：10) 東山取り付き (5：20)――(7：05) 東山山頂 (7：20)――(8：40) P 1100 (9：10)――(10：15) 荷上げ地 (12：45)――(14：30) $\mathfrak{B}_4$

東山の取り付きまでは、濃い根曲竹のヤブである。中腹は、ヤブが薄くピッチが上った。ここからは、昨日歩いた稜線が見渡せ、実に気持が良い。しかし、これもつかの間でしかなかった。山頂には、東洋大探険部のプレートがあり、我々もプレートを付けた。

東山からP 1100までは、胸程のササヤブで軽快に進んだ。P 1100の山頂は180°の展望である。P 1100と荷上地の間の鞍部より、道が現れた。道に会うまでは、背丈以上のしのヤブで、コンパスを頼りに進んだ。荷上げ品には、ほとんど異状はなかった。荷上地で大休後、登山道を進む。道のありがたさがしみじみ感じられた。P 1123を過ぎて、小休を取り、メンバーの体調を見るとTがバテ気味なので、登山道終点まで行く予定であったが、とりやめ、道に天幕を張る。水は稜線の北、下り20分。

7月26日　Ⓓ

$\mathfrak{B}_4$(4：50)――(5：40) P 900先の鞍部 (5：50)――(6：50) P 950先の左折点 (7：00)――(11：45) 栃ヶ森山 (12：15)――(13：05) $\mathfrak{B}_5$

天場より、20分程すると登山道も終り、ふたたびヤブ漕ぎである。しかし、P 900の下りまでは、踏み跡もあり、ヤブも薄く、大木をぬう様に進んだ。南に伸びるP 950から東へ折れるあたりは、ヤブが濃く、尾根が広いので注意を要した。東に進んでからは、すこしヤブが薄いが、栃ヶ森山に近づくにつれ、濃くなった。今日はTが元気ない。栃ヶ森を下った所を、切り開いて天場とした。水は尾根の西、下り5分。このころから、メンバー内に便秘に苦しむ者がでてきた。

7月27日　Ⓓ

$\mathfrak{B}_5$(4：45)――(5：40) P 1020手前 (5：50)――(7：10) P 1050先 (7：25)――(9：20) 桑原岳から伸びる尾根上 (9：45)――(10：30) $\mathfrak{B}_6$

出発する際、幾分ガスっていた。今日もヤブとの戦いである。P 1020の登りは、稜線上はヤブが濃いが、西側斜面は、腰程度のヤブで、歩きやすい。P 1050の南端から西南西に下る。これから桑原岳から伸びる尾根までが、49年度の夏合宿の際、最難関となった所である

ここは、尾根がだだっ広く、緩傾斜であるため、C.L.が後で、コンパスを見ながら方向を指示した。ヤブは一段と濃くなっている。桑原岳から伸る尾根にでてから、しばらくすると突然、小草原が現われた。今日は、時間的に早いが、メンバーに疲労が現われてきたのでここを天場にした。小草原の近くには、小さな池塘があったが、飲料水には適さない水は、北へ下り30分。

7月28日　◎

⚑6(4：35)――(6：05) 桑原岳 (6：20)――(7：50) P 1150 (8：05)――(9：20) 上鉢山 (9：30)――(11：45) P 1125 (12：05)――(14：25) 石滝山――(15：30) ⚑7

テントを出ると、眼下には雲海が広がっていた。桑原岳には群大のプレートがあり、先輩を敬して、その下に我々のプレートをつけた。桑原岳からP 1100までは幾分進みやすい。このころから視界は、20m ぐらいで、コンパスを頼りに進んだ。上鉢山山頂は、低木だけであり、ガスッてなかったら天望はよいだろう。石滝山の登りは、ヤブが濃く、おまけに時々雨がパラツキ出したので、トップをこまめに変えて、一気に肩までいった。石滝山から、踏み跡が現われた。天場はP 1050の手前で、6天6張りぐらいの広さがあった。水は西へ30分。夕食後は、みな、つくろいものに予念がない。

7月29日　◐

⚑7(4：15)――(5：05) P 1050 (5：15)――(6：00) 鞍部 (6：10)――(8：20) 大薊山山頂――(9：45) 鞍部 (10：00)――(10：50) P 1120 (11：15)――(14：36) 林道出合い (15：05)―― 須川温泉 (16：17) ⚑8

ヤブコギも今日で最後である。そのためか、メンバーの顔にも明るさがうかがえる。期待していた踏跡は、P 1050手前の西に伸びる尾根の肩で、終っていた。P 1050から鞍部までは、ヤブは薄い。しかし、大薊の登りからモーレツなヤブとなり、また、しばし、だましピークが現れ、我々の疲労を倍加させた。しかし、これにもめげず、Iはこの登りをひとりでトップをしつづけ、一同を感服させた。この合宿で1番つらい登りであった。山頂にプレートを付けた。大薊山からは、しばらく細尾根でピッチが上った。P 1120からはP 1053を目差して進み、P 1053の手前で沢に降りた。沢に降りてしばらくすると道が出てきた。途中、沢で今までたまった汚れを落した。

須川温泉に着き、キャンプ場の監理小屋へ行くと、1Partyが途中下山したとのことであった。夕食後、温水プールに、水泳兼入浴に行った。やっとみんなの顔に笑顔がみられるようになってきた。

7月30日　◐

⚑8(8：30)――(10：30) 栗駒山山頂 (10：40)――(12：20) ⚑8 (13：10)═══(14：40) 一ノ関駅 (15：50)▬▬(18：32) 仙台 (21：22)▬▬7月31日 (3：23) 小山 (6：26)▬▬桐生

朝食後、天幕を撤収し、栗駒山に向った。　昨日は気が付かなかったが、キャンプ場はたくさんの小学生でにぎわっていた。　栗駒山の途中の広い湿原には、たくさんの高山植物が咲き乱れ、我々の目をなごましてくれた。

山頂で写真を取り、足早に天場に戻り、帰路の仕度をした。　　（橋本記）

秋合宿（北アルプス）

昭和53年10月１日～７日

Ｃ．Ｌ．古川、Ｓ．Ｌ．根岸、江川、太田、村田、井上、

10月１日　桐生駅▬▬松本駅

桐生を午後の電車に乗り、夜松本駅に着く。松本では秋祭りをやっている。しばらくそれを見学し、駅で寝る。

10月２日　①　松本駅――上高地――槍沢ロッジ（３：00）$\mathfrak{S}_1$

上高地での朝の空気はとても冷たい。着いたのが日の出前であったことにもよるのだろうが、松本とは十数℃違うように感じる。紅葉が始まりかけ、冷たい空気の中で紅葉はさらに色づく。小休、昼食に時間をかけてしまい、予定を延長し殺生ヒュッテまで行くつもりであったが、槍沢ロッジにキャンプする。

10月３日　○　槍沢ロッジ（５：30）――（10：30）槍の肩　（12：00）――双六小屋（４：30）$\mathfrak{S}_2$

今日は朝から気温が高いためか疲労度が激しい。槍ヶ岳の頂きでしばらく過ごす。すこし霞が出ているが遠望はすばらしい。富士山もよく見える。南ア、八ヶ岳、上越もよく見える。紅葉がとてもきれいである。西鎌尾根に入ってしばらくして昼食を取る。樅沢岳からすこし下ると、双六池が見える。今日のテン場はここである。明日は最終目的地の雲ノ平である。裏銀座コースのわきにあり、黒部川源流を有し、いくつかの庭園をもつ台地状のそこは秋のこの紅葉でさぞきれいであろう。

10月４日　①→◎$\mathfrak{S}_2$双六小屋（５：30）――（９：30）三俣蓮華岳（10：30）――（11：00）三俣山荘――（11：30）黒部源流（11：45）――（12：30）日本庭園（12：50）――（１：30）雲ノ平キャンプ地$\mathfrak{S}_3$

三俣蓮華岳当りから雲ノ平が良く見えて来た。緑一色の台地状のそれがよく見える。紅葉は黒部の源流辺りに黄、赤、その中間色と緑、なかなかきれいである。三俣蓮華岳で紅茶を飲み、三俣山荘まで下り、そこで昼食を取る。黒部の源流付近は、遠くで見るより、ずっときれいであった。高木の紅葉はとてもきれいである。源流から日本庭園までは、２５０ｍの登り、疲れたころ日本庭園である。這松とチトウの庭園で、遠くから見えていた緑は常緑の這松であったのだ。すこしがっかりであった。キャンプ地は祖父岳への分岐からすこし下ったところにある。水は近くに流れている。ここまでテン場料、水は無料である。夕食を食べる頃から、二人が体の不調を訴える。天候は悪くなる。夕方から寒くなり、天

候がくずれれば雪になるのではと不安である。

10月5日　⊗→◎　沈殿 $\mathfrak{B}_{3\cdot4}$

朝起きて見たら、雪が降っている。一人は歯痛から、カゼをこじらし、一人はカゼである。トランプをやって時間をつぶしたりするが、彼ら二人が心配である。

10月6日　◎時々◐→●

$\mathfrak{B}_{3\cdot4}$雲ノ平キャンプ地(6：00)——太郎平小屋（1：00)——(4：00)折立平（9：00)——富山駅▬▬桐生駅

ガスの中雲ノ平を歩く。程なく薬師沢小屋のつり橋に来る。ここまで来ると、黒部川渓谷の片鱗を見せる。二人の調子は良いようだ。今日中になんとか太郎小屋に着きそうだ。

太郎平小屋には予定より早く着いた。予定では、薬師岳ピストンして下山するのであったが今日中に折立平まで下ることにする。下りてみると、バスは動いていないようだった。というのは、翌日は日曜日とシーズンオフで9月までしかバスが来ていないという事であった。工事中のトラックが、親切にもわれわれを荷台に隠し、富山電鉄の駅まで乗せてくれた。これはＳＬの根岸のおかげである。その日のうちに夜行で桐生に帰ることにする。

記：古川

秋合宿（南アルプス）

山域　北岳～塩見岳

期間　10月1日～7日

メンバー　Ｃ．Ｌ．黒沢（2Ｓ）、Ｓ．Ｌ．飯島（2Ｗ）、関口（2Ｍ）、中村（2Ｐ）、北川（3Ｍ）、本多（3Ｐ）

10月1日

桐生▬▬高崎▬▬八王子▬▬甲府═══広河原 $\mathfrak{B}_{1}$

甲府駅に着くと、もうすでに広河原行きのバスはなく、他の2人パーティーと同乗して、タクシー2台で行くことにした。とにかくここまで来るのに丸一日かかった。広河原で降りると、下山して来た人やこれから登る人達でごったがえしていた。我々は、今にも落ちそうな吊り橋を渡りここで幕営する。

10月2日　快晴

$\mathfrak{B}_{1}$(6：45)——(8：55) 二俣（9：05)——(12：00) 八本歯のコル（12：10)(12：45) 分岐（12：55)——(13：20) 北岳頂上（13：55)——(14：10) 分岐（14：25)——(14：50) 北岳山荘 $\mathfrak{B}_{2}$

ゆっくり起きて、大樺沢をのんびりと進む。さすが南アルプスだけあって、この時期でも結構たくさんの人がいる。いくつかのパーティーを追い抜き日本第二峰の北岳を目指す。岩場にとりついている人の姿も目についた。灌木の中の道をしばらく進み、これを抜けると急に視界が開ける。八本歯のコルだ。ここから30分程ゆくと、北岳山荘への分岐がある。主稜線はまただがここにザックをおろし、北岳をピストンすることにした。10分程で主稜線の吊尾根分岐にでる。さらに15分で北岳の絶頂に着く。天気も良く、360°の展望はさすがにすばらしい。午後3時前には山荘に着いた。この山荘は今夏オープンしたばかりのもので、かなり立派なものであった。ここで水を3本買い飲料水とする。今日は部分日食で、夕方にはカレーを作りながら外へ飛び出し、肉眼で見た。また、夕日に染まった富士山もすばらしかった。

10月3日　晴

B2(6：25)――(6：55) 中白峰 (7：05)――(8：25) 間の岳 (8：45)――(9：35) 農鳥小屋 B3 (11：25)――(11：55) 西農鳥岳

なだらかな道を快適に進む。それでも三m峰を2つ越えた。天場予定地の農鳥小屋に着いたのは、なんと9時半だ。間の岳では、農鳥小屋をやめて熊ノ平小屋へ向うとか向かわないとか悩んでいたものの結局予定通りにこちらへ来た。水場は東へ6分下ったところだ。ところどころに罠が仕掛けてあるので、細い道を歩くときには注意しないと危ない。昼食後、約2名を残して西農鳥岳のピストンに向った。初めはHさんもしぶっていたが、3人がかなり上までいった頃、ひとりで後を追って来た。30分程でピークに着く。そこでHさんが北岳を股間に写した写真は面白い。夏みかんを食べたり、しばらくのんびりした後、Kさんが農鳥岳まで行って来ると言い出し、ひとりで出かけた。その間、3人はそれぞれいい場所を見つけ、昼寝をしていた。そこに農鳥小屋の住人が地下たびでかけ登って来た。そして1分と休まぬうちに農鳥へと向って行った。「元気だなあ。」1時間程でKさんも帰って来て、テントへ戻る。今日の天場には、我々の他には3パーティー程だった。

10月4日　晴→曇→雨→雪

B3(6：20)――(6：50) トラバース道――(8：15) 熊ノ平小屋 (8：30)――(9：50) 展望台・昼食 (10：25)――(11：40) 雪投沢手前のコル B4

天場から10分程戻ると分岐がありそこを左へと行く。間の岳、三峰岳をまいてゆく道だ。ところどころに沢も流れている。Nさんが歩いているところを写してやると言って、ひとりで先にゆく。我々はのんびり歩いていたら、あっと言う間に見えなくなってしまった。熊の平小屋は、水場がとても近い。「水場5秒」というカンバンもあり、行ってみるとまさしく5秒であった。小屋を過ぎ少しゆくと稜線とまき道の分岐があり、迷わずまき道を

選んだが、道は悪く、30分程で稜線と合流したのだが、稜線は高低差もあまりなく、道も良さそうなので、稜線の方が楽だったろう。樹林帯をしばらく行くと展望のきく岩峰に立つ。展望台である。目指す塩見岳もだいぶせまってきた。ここで昼食をとる。空を見上げるとウロコ雲がでて来て、これからの天気が心配だ。再び樹林帯の道を進み、左手には池の沢小屋への道がつけられていた。やがて、ガレ場の上端を横切り、北荒川岳の南斜面に出る。水場もあり、良い所なので天場とする。水場は東へ2分下ったところだ。西側はすさまじいガレ場である。夕方から雨が降り始め、夜には雪と変わった。

10月5日　吹雪 ▲4 → ▲5

テントの外は猛吹雪となり動けなかった。食糧計画を立て直し、あとはトランプや、歌で暇をつぶした。夜中には、何度か起きて、雪降ろしもした。後で知ったのだが、この日富士山では、初冠雪を記録した。（残念な事に、雪をまとった富士の姿は見られなかった。）

10月6日　曇→晴

▲5（6：45）——（7：50）分岐（8：00）——（8：50）林道——（9：10）池の沢小屋——（9：40）分岐（9：45）——（10：40）昼食（11：10）——（12：10）奈良田越（12：15）——（13：45）黒河内沢出合（13：50）——（15：10）ダム・昼食（15：40）——（16：25）奈良田温泉 ▲6

雪も止み、空は西の方から青空が見え始めている。雪の重みのためか、ポールが1本折れてしまった。景色は2日前とガラリと変ってしまった。もちろん雪のためである。一面の雪化粧はまことにすばらしいものである。が、しかし塩見岳も頂上付近ではかなりの積雪が予想されるし、途中の稜線でも岩場がある、冬山装備を用意していない我々には、ちょっと怖いので、あきらめてひき返すことにした。カッパを着て、雪の中の道を展望台まで戻り、そこから池の沢小屋へと向う。すこし下るともうほとんど雪はなかった。カッパもとり下へ下へと進んだ。やがて林道に出て、タラタラと足を進める。池の沢小屋が林の中に見え、その先に雪投沢への分岐があった。この道を使った方がはるかに早かったであろう。11時20分奈良田越への分岐があり、林道を尻目にまた登山道へと入って行った。この頃から先は地図がなく、コースタイムの書かれた手帳だけが頼りだった。ようやく奈良田越へ着き、あとは下れば町に出るだろうと思って元気に下り始める。しかし下れど下れどもその気配はなく、最後は走るように下った。やっと沢にぶつかり、「この先に町があるだろう。」とみんなホッとした。ここで一息入れて、元気に出発。沢を渡ると、な、な、なんと道は山の上へと続いているではないか。地図を持たない恐ろしさである。再び山を越えて、午後3時過ぎようやくダムに着いた。今度こそはまちがいない。2度目の昼食をとり、30分程で奈良田温泉に着いた。近くの河原にテントを張り、店でビールを買ってきて打ち上げだ。店の人の話では、奈良田越を使う人は今ではめったにいないという。ところで、ある美青年がビールの追加を買いに行ったところ、つまみにみょうがをたくさんくれたのである。

10月7日

🚌6（9：40）═══（11：45）身延駅▬▬甲府▬▬八王子▬▬高崎▬▬（21：11）桐生

バスは行けども行けども山の中の道で、2時間かかってようやく寂しい駅に着く。ほんとうに山奥だなあという気がした。結局、丸一日かかって桐生へ帰ってきたのである。今回の合宿は全般的に楽な行程だった。しかし一時に2種類の南アを見ることができたし、準備不足などもあり、良い経験になった。（記：F．）

S．53年度春スキーの荷上げ山行

◎期間：S 53．11月2日～3日　2日間

○山域：尾瀬

○メンバー：CL．橋本　勇、SL．太田　稔、本多偉知朗、中村雅秋、根岸和彦、黒沢浩（以上6名）

11月2日　桐生：◎　大清水：うす雲り

桐生（群大）（2：00）═══（5：30）🚌1大清水（7：30）C．G．，S．

車2台にて沼田を通らずに大間々から日光へ向う道を行く。途中多少道の悪い所はあるが、沼田を通って行くよりはかなり時間が短縮されるようである。また大清水には天場指定地はないが大清水小屋の主人に頼んで小屋の駐車場にテントを張らしてもらった。

11月3日　小雪時々晴れ

C．M．（7：00）、大清水（7：30）═══（10：00）長蔵小屋（11：00）═══（2：00）大清水（2：30）═══（5：30）工学部

朝は小雪の舞う天気であった。しかし登るにつれて時おり晴れ間も見え天気の回復を期待したが結局は帰りのころになると本格的な雪となった。このまま尾瀬は本格的な冬に入って行くのだろう。特別に記す事もないので荷上げ品リスト及び記録事項を以下に記す

—荷上げ品リスト—

米	20 kg
カンズメ	13 コ
石油	12 ℓ
みそ	2 kg
さとう	2 kg
ローソク	2 本
酒	4 ℓ

カンズメ13コの内分け

いわし	2 コ
さば照焼	2 コ
いわしかばやき	2 コ
いか	1 コ
マグロフレーク	1 コ
牛肉	1 コ
焼肉フレーク	4 コ

—交通機関連絡先—

関越自動車

TEL：0278—58—3147

※注）荷上げ品は長蔵の本館ではなく白水小屋に置いてあるのでそちらに行くように。

文責：太田　稔

昭和53年度春スキー合宿

○期間：昭和54年３月23日～３月29日

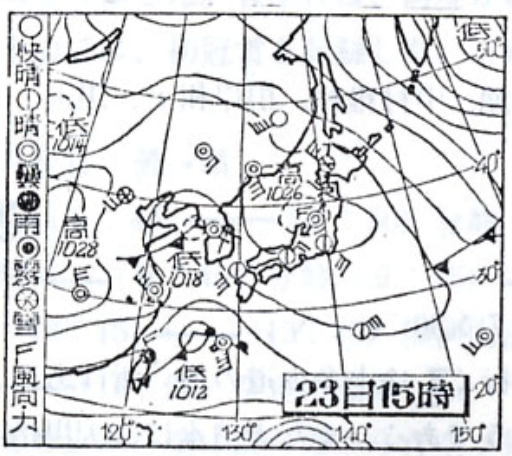
○山域：尾瀬

○メーバー：Ｃ．Ｌ．太田　稔、Ｓ．Ｌ．中村雅秋、古川孝司、黒沢　浩、井上裕治、根岸和美、喜古寿一、村田　進、井瀬　純。（以上９名先発）橋本　勇、北川昌基、江川幸和、武井正彦（以上４名後発）　（計13名）

３月23日　○　無風、暖かい。

桐生（６：30）▬▬▬（８：00）沼田駅（８：30）═══（10：00）大清水（10：30）（12：00）一ノ瀬（12：10）────（２：30）三平峠（２：50）────（４：50）長蔵小屋

電車に遅れる者もなく無事桐生駅を定刻に出発。沼田駅でマイクロバスが来るまで30分程待ち、８：30に大清水に向って出発。大清水の小屋までは完全に除雪してあり一年中確実に入れる。また普通車の乗入れも可との事である。

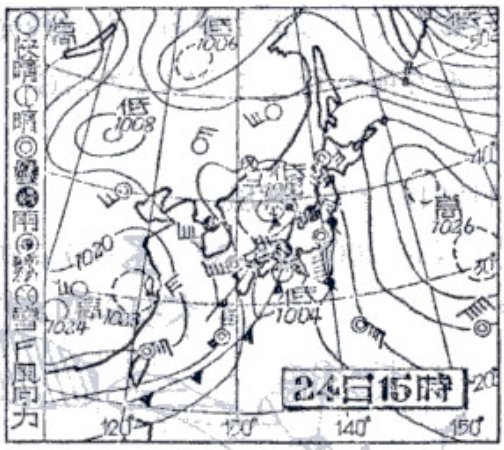


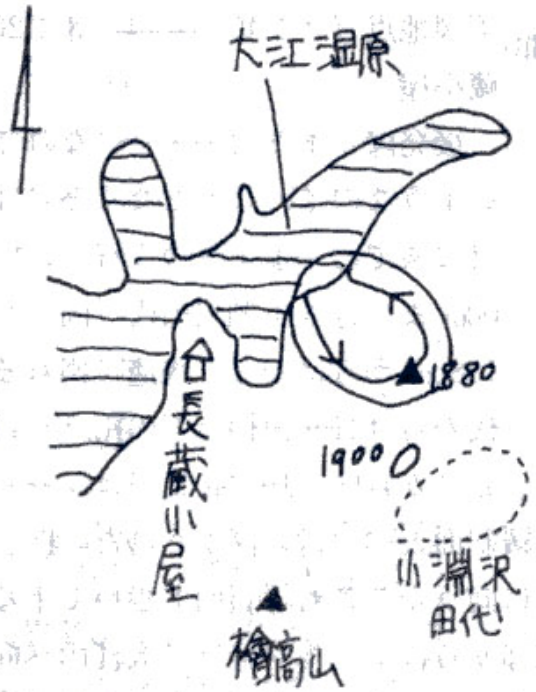
大清水付近は同日の天気図からもわかるように移動性の高気圧におおわれており快晴無風であたたかかった。また積雪はこの付近で50cm～60cm程度、吹留りで１ｍといった所である。ここから全員シールをつけ10：30出発。また前方には確実なトレールが付いており道を見失う心配はまったくなかった。２：00一ノ瀬に到着、ここから冬路沢に入って行く。冬路沢はずっと左岸を通って行くが沢に入って５分ぐらいの所は急斜面のトラバースとなりすべり落ちると川の水を浴びる事となるので注意を要する。雪は十分しまっており、最近降ったあともなく雪崩の心配はなかった。あとは三平峠までの単調な登りだけ。最後の30分は傾斜も急だったので階段登行をくり返したがほとんど疲れは感じないほどゆっくりだった。また冬路沢をつめて行き再び林道へ出た付近にはスノーボートが木にかけてある。Ｐ．Ｍ．２：30三平峠に到着。三平からは燧ヶ岳、沼が望めコースをまちがえる心配はなかったので東電小屋に集合することにして滑降開始。しかしみな山スキーにはなれていないので長蔵小屋に着いたのは４：30をまわってからであった。小屋に着いてすぐに越冬隊長の石川さんに挨拶に行き荷上げ品を受け取って来た。またここでは冬期においても天場は決まっており夏期と同様の場所に天幕は張ることになった。また水は天場の奥の沢に出ているそうであるがみつからなかったので小屋でわけていただいた。それから雪洞も作ってみた。１時間で３人程度入れる物が完成した。もう時間もおそかったので荷分けは明日することにしてＰ．Ｍ．９：00Ｇ．Ｎ．

3月24日 ◎→ふぶき→◎→うす◎

(6：00) G．M．

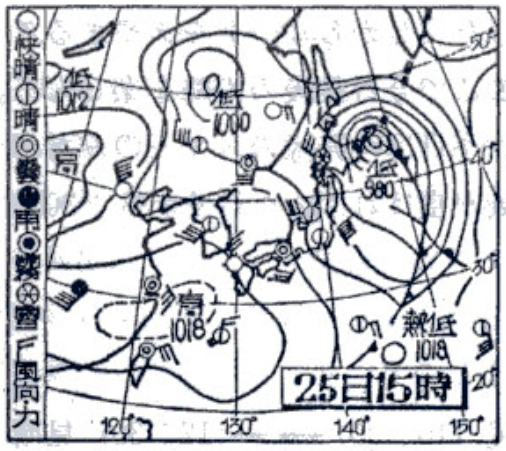
朝は曇っているだけで雪は降っていなかったものの風が強く初めは大江山の方へ進んだが、天候も悪くなりそうであったので小屋の近くに適当な斜面をみつけて練習した。天候の悪い日は気分は沈みがちだが雪質はかなり良く思いきり滑れた。場所は下図のとおりであるがここが小屋には一番近い練習場といえるであろう。登りは直接ピーク目指して登って行き、下りは北側のゆるい斜面をまわり込んで下る（少し傾斜がゆるい）と良い。しかし上部はブッシュが多いのでルートをうまくとって下らないとおもしろくないかもしれない。しかし下部60mは樹もまばらなので初心者でも樹にぶつかる心配がないのでこの付近で斜滑降、横スベリ、山まわりなどを十分指導したつもりであったがあまり成果はあがらなかったようにも思われる。練習は約2時間で終え天場に帰った。こんどは雪洞作りの特別講習会を行なった。この雪洞作りはみんなよくやって大きなものができたので夕食は全員ここに集まってとった。9：00G．N





3月25日 ⊗（かなりの大雪）

G．M．（6：10）⛷（8：40）——（9：00）きのうと同じ所（10：30）全員集合（10：40）——（11：00）P．1900m（11：20）——（11：40）大江湿原（11：50）自由練習（1：40）——（2：00）天場着



今日はかなり激しい風雪だったので自由練習としたが結局出て行ったのは3名であった。しかし雪質が良きそうなので結局全員で練習となった。今日はP．1800mまで全員で2度行き、中村トップで山スキーの登り及び下りのルートの取り方をおもにやった。今日は雪質が良かったのでみんなの技術は目に見えて向上したようだ。しかし明日は燧まで行くと思うとまだ不十分であろう。その後は自由練習にきりか

えたが少し登って疲れたのか身の入った練習は出来なかった。今日は1：30に練習は終え、テントで後発隊の来るのを待った。しかしいくら待っても彼らは来ず、とうとう日は暮れてしまった。あたりが真暗になったころ後発隊がやって来た。大清水からかなり時間がかかり疲れているようであった。後発隊の体調を考えて明日の燧岳はやめにして全員でもう少し楽な所へ行くことにした。G．N．P．M．9：00、

3月26日　○　無風

（6：00）G．M．（9：30）――（10：00）大江湿原（10：00）――（10：45）P．1880m（11：00）――（11：30）小淵沢田代（12：00）――（12：55）下江山山頂（1：55）――（12：20）下図地点（2：40）――（3：20）長蔵小屋

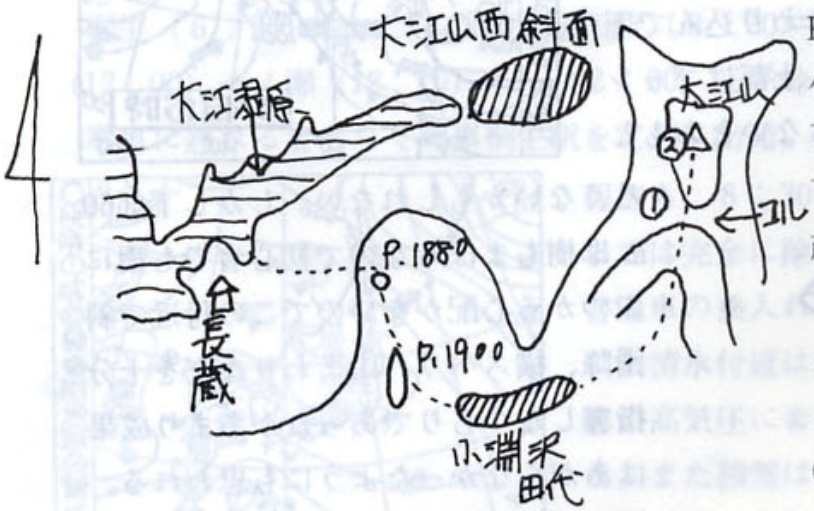
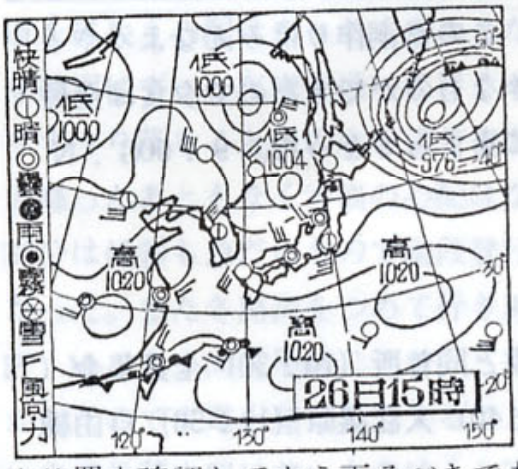


図1.大江山周辺図

後発隊がまだ山スキーになれていないようなので、しかたなく今日は練習日にあてた。まずきのう行ったP．1800mまで行き小淵沢田代へ向った。P1880mからはかなり快適に滑れる。田代からは日光白根などの山々が目の前に迫って来る。ここからP．1920mまではシールのいらないほどの緩斜面とベタ雪に悩まされた。P．1920mから大江山に向うがここも緩斜面で歩いて下るようであった。鞍部からはシールを付けて大江山へ向った。山頂からは至仏、燧、平ヶ岳などの山なみが望めた。山頂で昼食を済ませ下る。下りは大江山から沼山峠への尾根の西側を通って行けばまちがわずに下れるであろう。

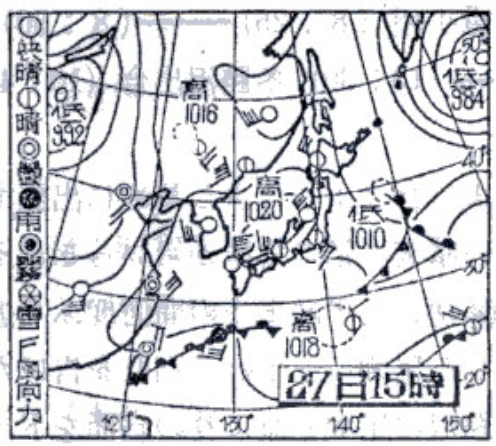


できれば①点（図1参照）まで下って現在位置を確認してから下るべきであったが、実際には②点（図1参照）から下ったためコースの正誤がわからずにかなり途中で時間を使ってしまった。しかしルートをあやまることもなく大江山の西斜面のすばらしいゲレンデに出た。ここで今日最後の滑降を楽しんだ。2：40P．M．ここを離れ小屋へ向う。3：20小屋到着。今日は後発隊のスキーのみだれに足をとられた一日となり明日の縦走は断念。明日は天気が良ければ燧へ行く。8：30G．N．

3月27日　⊗→◎→◐あたたかく無風

（8：30）G．M．（9：50）――（10：00）沼尻（10：20）――（12：30）見晴

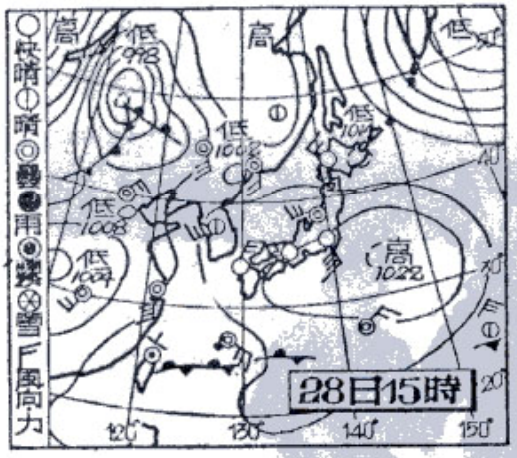
（1：00）――（3：00）沼尻（3：20）――（4：00）天場



今日は天気さえ良ければ燧ヶ岳へ行く予定であったが、前日かなりの降雪があったので原を見に行くことにした。今日は出発が遅れ9：50出発となる。沼尻まではシールを付けずに雪の積った沼の上を快調にとばす。沼尻から先もシールを付けずに行ったがやはりシールを付けた方が楽だったようだ。また白砂田代までは沼尻川の北側を行けばルートをはずすことはないだろう。白砂田代のピークからはいよいよシールをはずして滑降開始。しかし左トラバースばかりでまいる。イヨドリ沢までくればあとはゆるい斜面をずっと見晴まで直滑降ですぐである。ここまで思いの他時間がかかり、見晴に着いた時は3時をまわっていたので、すぐ出発した。帰りは来たトレールを確実にトレースして行った。帰りが登りというのも山スキーではめづらしいだろうが、そのような時はもう少し時間に予裕をもたせるべきであった。沼尻に着くころには今まで空をおおっていた雲も切れて来てかたむきかけた日が沼に長い影を落し、幾条もに引かれた沼の白い線が印象的だった。今日は天場に着くのはおそかったが、雪洞を2つ作った。明日はいよいよ燧だ。

3月28日　○無風　あたたかい

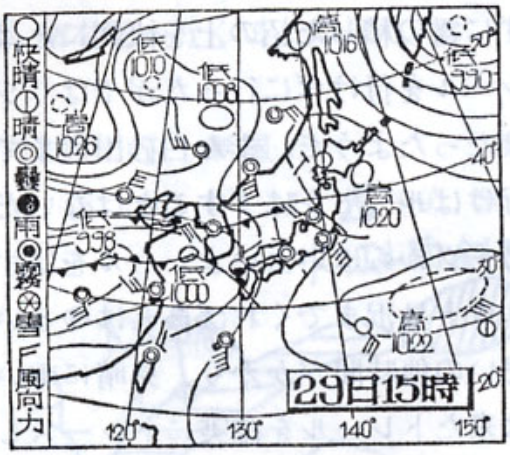
G．M．🚙（5：30）――（8：30）――（9：00）沼（9：00）――2100m地点（11：30）――（12：10）山頂直下のpeak（1：10）――（3：30）―🚙（9：00）G．N．



今日は天候に恵まれていよいよ燧に向うこととなった。初めの緩い傾斜では順調に進んだが、傾斜がきつくなるにしたがってTとHが遅れぎみになる。そのうちにとうとうつぼ足の連中においこされる。やっとの思いで2100m地点についたのは11：15、ここで昼メシ。ここからはかなり風が強いので全員ヤッケ着用、また部分的にはクラストしている所もあり登行はかなりめんどうとなって来た。そして頂上直下の鞍部まで来たが、ここからは斜面が急になっておりアイゼンピッケルなしの我々の領域でないと判断。山頂を目の前にして断念した。いよいよここから大滑降開始。全員気のゆるみのないよう気をひきしめ、また途中の集合点を決め思い思いの格好で下った。上部は低温のため滑り安いが、2100m付近からは雪が非常に重く、強くアンギュレーションをかけないとターンできない。それでも全員事故もなく沼に下ったのは3：00をまわっていた。明日はいよいよ下山ということで、あまった石油、米を小屋へお礼においてきた。また小屋から無線でタクシーがたのめるというのでそれもお願いした。

3月29日　○　無風

G．M．B（6：00）――（7：40）――（8：20）東電小屋（8：25）――（8：50）三平峠（9：00）――（10：00）林道出合（10：10）――（10：30）冬路沢出合（10：40）――（11：00）大清水（2：30）――桐生



タクシーの時間にまに合うように少し早めに出発する。今日もすばらしい晴天。沼の雪原からいっきにそそり立っている白い燧岳、三平峠までの間何度ふり返った事か。一週間過した尾瀬に三平峠で別れを告げた。三平からの下りは冬路沢の尾瀬ヶ原よりの斜面をトラバースぎみに斜滑降で下る。全員入山時とは別人のようにスキーが上達した。林道の出合で一息入れてそこからは林道にそって滑る。大清水まではあっという間に来てしまった。この付近も入山時に比べてだいぶ雪が減ったように思われる。ここでゆっくりと日なたぼっこをしてタクシーの来るのを待つ。タクシーは予定どうりに来てくれて全員無事に下山。

文責：太田　稔

昭和52・53年度個人山行記録

巻機山

日付：昭和５２年６月１９日
メンバー：橋本、江川、北川、

６／１９　雨。
六日町（５：４５）═══（６：１５）清水（６：５０）──登山道入口（７：１５）（１０：１０）小屋（１１：５５）──巻機山頂（１２：１０）──（１２：３５）牛ヶ岳（１２：４５）──巻機山頂（１：０５）──（１：３０）割引岳（１：５０）──（５：３０）沢口（６：１０）═══（６：３０）六日町

六日町駅で一時間程仮眠。五時頃ラーメンを作る。途中、バスの左手に１５０ｍ位の釣鐘形の小山を見、あんな所を降りてきたりして等と雨を吹き飛ばす様に三人笑っていたものでした。清水の民宿で雨の様子をみるが、あがった様なので出発。

六合目までくると天狗岩が見える。ガスの中、立WV、WWVなど人が多い。小屋で昼めし、雪渓で遊ぶ。したたかに尾底骨を打つ。

巻機山頂群は一応全部踏もうと牛ヶ岳まで行ったが、見る事もする事もあまりなかったので割引岳へ向かう。話はすぐ沢登りに走る。粒々が判りそうなガスの下に割引沢の褐色の岩石や黒くかすむ天狗岩を見ながら、尾根づたいに沢口部落へ下る路をとる。

Ｐ１７３０ｍを越えたあたりから雨が激しくなる。どこまでも繰り返すらくだのコブのような尾根を降りて登って滑ってずぶ濡れになりながら１回も休まず沢口のバス停まで。Ｅ氏の手帖にはこう書かれていた。「道はげしく長し。」

うすくうずまいては消える湯気の向こうに今しがた降りて来た最後のコブ、そう、バスの中で笑った小山が雨煙につつまれ、その手前には、道をマチがえた採泥地が雨を映し、さらに鈍く光る舗装路を隔てて、このガランとした建物に三人の若者は男のまなざしを輝かせて、カップの紅茶をズズッと飲んだ。　　－北川記－

谷川岳～平標山

日付：昭和５２年６月２６日
メンバー：江川、北川、

６／２６　曇りのち９時頃より晴れ。
土合（３：３０）──森林限界（５：１０）──（８：３０）大障子小屋（９：１０）

（１０：００）万太郎山（１０：１５）――毛渡沢乗越（１０：４５）――（１１：０５）エビス大黒下鞍部（１１：１５）――（１１：４０）エビス大黒（１２：００）（１２：２０）仙の倉避難小屋（１：０５）――（１：３０）仙の倉山（１：４０）昼寝――（３：３５）平標山――（５：０５）元橋バス停

西黒の途中。雲の切れ間より青空が見えるが寒い。乳色のガスの中、私だけオキをピストンするが、初めてなので判らず二十分以上飛び歩く。戻って来たら、江川さんが岩陰で小さくなってフルえていた。二人共寝不足で稜線を居眠りしながら漂うように歩く。まつげごしに江川さんのそのヘコヘコ歩く姿を見て吹きだすと私の眠気が少しとれるのだった。空一面に白雲が流れている。かなたは小さく遅くあるいは動かず、頭上は大きく白く速く一瞬爽快感が頂点に達する。大障子小屋で眠気覚ましに紅茶を飲む。この頃より晴れてくる。万太郎での江川さんの感想、「夏山である。」

エビス大黒あたりにくるともう腹も減って目がまわり始めてきた。避難小屋についてビスケットを食べたとたん睡魔の嵐。小屋の前に座ったら二人供そのまま寝てしまった。平標について紅茶ココアを飲んでまた眠る。小植物群の寝床はひんやりとして気持ちがよかった。

―北川記―

八　ヶ　岳

期間：昭和５２年　８月２９日～３１日

メンバー：江川、村田、

８月２９日　◎

桐生（６：33）――（11：45）小海（13：00）――（13：45）稲子湯（13：55）――みどり池（15：35）――（16：40）黒百合平

小海線は高原列車と呼ばれるだけあって景色がよい。窓から外を見ていると時間のたつのを忘れてしまう。車中の人は皆、顔がまっ黒。夏も終りだと思うと、とても寂しかった。稲子湯からはずっと登りである。急な樹林の中を登って行くと古びた線路が出てきた。みどり池は小さな神秘的な池である。池畔にはひっそりとした「しらびそ小屋」があり、あまりに絵になりすぎている。右手に稲子岳の岩壁を見ながら中山峠へと向かう。一時間ほどの急登で峠に着く。そこから歩いて十分程の黒百合平にテントを張る。

８月３０日　◎→●

黒百合平（６：00）――（７：20）東天狗（７：30）――（８：25）夏沢峠（８：35）（９：15）硫黄岳（９：45）――（12：25）赤岳（12：55）――（14：00）キレット小屋

東天狗から根石岳をへて夏沢峠へ向かう。４０分程の急登の後、硫黄岳へ着く。頂上は広く人がたくさんいた。昼食をとった後出発。ガスの中から時々現われるケルンが幻想的であった。途中横岳の岩稜を通り赤岳石室まで行く。石室からは３０分で頂上であるが急登と強い日ざしのため非常に疲れた。赤岳頂上で先ほどのガスも晴れ、すばらしいながめになった。頂上からの下りは、ガレ場の下降であり、足もとの岩がゴロゴロくずれてゆく。５００m近く一気に下りキレット小屋に着く。

8月31日 ●→◐

キレット小屋（5：00）——（6：25）権現岳（7：10）——三ッ頭（7：45）——（9：00）天女山（9：05）——（9：40）大泉駅▬▬桐生

朝ラジウスの調子が悪い。何回やり直しても消えてしまい、そのうちライターまでも消えてしまった。酸欠であった。昨晩降った雨がツェルトを濡らし通気がなくなってしまったのだ。権現岳へは、クサリ場、ハシゴを登って１時間程で着いた。朝からの雨もあがり青空が広がった。頂上からの景色を満喫した後すぐに下った。途中三ッ頭を上り、そこからは１０００mを一気に駆けおりた。（S．M）

巻　機　山

期間：昭和５２年１０月２３日

メンバー：江川、村田、

桐生（10：32）▬▬▬（3：30）六日町（5：45）——（6：15）清水（6：25）——（8：20）ヌクビ沢出合（8：30）——（10：30）割引岳（10：40）——（11：10）巻機山（14：30）——（17：00）清水（18：13）═══六日町

六日町駅で仮眠する。構内の天井からは大きな提灯が目についた。清水までバスで行き道標に導かれて林道を行く。天気が良いせいか人がたくさんいた。途中割引沢に下りそこから沢ぞいに登って行く。ヌクビ沢出合で、割引沢の本流を登るか考えたが、やはり一般コースであるヌクビ沢を登った。２・３の滝を高巻き割引岳に着いた。ここよりクマザサの稜線を巻機に向かう。巻機山頂は広々とした湿原であり池塘が点在している。夏なら高山植物が咲き乱れていることだろう。時間があるので昼寝をした。目がさめてみるとあれだけいた人が皆帰ってしまった。完全に無視されていた。井戸尾根より下山した。（S．M）

谷川岳

期間：昭和52年10月23日

メンバー：本多、大橋、

登山センター（9：10）――森林限界（10：40）――（12：55）谷川岳（1：35）――（2：30）茂倉――（3：17）矢場の頭（3：27）――（4：55）土樽駅

今までに何度も谷川岳付近の山々へは行ったことがあったが、谷川岳の山頂にはまだ一度も立ったことがなかったので、雪が降り出す前にぜひ行っておきたいと思っていた。天気は秋晴れ、ひさしぶりのパーワンである。ザックは大変軽いのだがなんとも西黒尾根は疲れた。途中森林限界を越えたところで、教育のパーティーに合う。マチガ沢をやった帰りとのこと。一緒に記念撮影や雑談をしているうちに40分がここで過きてしまった。山頂に着くと天神ルートからの登山者で、大変、人が多くうんざり。なかには小さな子供づれの家族までいる。憧れの谷川岳山頂にきたという気はまったくせず、どこかの行楽地にでもきたような気分である。人をかきわけ三角点を踏んだ後、一路茂倉へ。さすがに茂倉山頂付近までくると人影はなく、ここであらためてまわりを見わたすと、浅間、巻機山、日光連山、すばらしい眺めである。本来ここからさらに蓬峠まで行く予定であったが、時間の関係でここから土樽駅へ下山することにした。　　記：本多

苗場山

日時：昭和52年10月22日～10月23日

メンバー：橋本　勇、

10／22（22：32）桐生▬10／23（3：20）湯沢駅（5：35）═祓川→（7：15）和田小屋（7：25）→（8：40）中ノ芝（8：50）→（10：05）苗場山頂（11：00→（13：20）赤湯（13：40）→（14：15）元橋═湯沢駅▬桐生

あい変らず夜行列車は登山客で、ごったがえしており、足の踏み場もない程である。しかし、土合を過きると車内はさすがにすき、からだを十分伸してくつろいだ。

湯沢駅で仮眠後、いよいよ出発である。バスに乗り祓川まで行く。和田小屋は思っていたより大きいが、だいぶくたびれていた。見渡すと登山道の付近にはリフトが出来ており、苗場山が観光の波によって汚されるのも近いかもしれない。そんなことを考えながら、なだらかな登山道を進むと、所々の木道には薄っすら霜が付き、朝日で光り、空は真青な秋晴れ、回りは紅葉の真盛りで心もなごんでくる。下ノ芝、中ノ芝と過き上ノ芝に着くと目の前がパット開け、10人程度の人がくつろいでいた。神楽ヶ峰までの広々とした尾根を行く。

神楽ヶ峰からはこれから登る苗場山が正面にどんと構え、その右には鳥甲山が見えた。神楽ヶ峰からごろごろした道を下り、カミナリ清水を過ぎた所には6天3張ぐらいの天場があった。苗場山の最後の急登を汗をぬぐいながら登り、山頂の片隅にやっと立った。まさに片すみという感じで、頂上はなだらかな傾斜を持つ平原となっており、所々には池塘が点在して、今まで自分の持っている頂上という概念がくつがえされた思いである。

山頂にしばらくいると、山岳仏教盛りし頃の古代の人々が、今とは比較できない程の労力の後に、この越後才一の苗場山の頂に立った時、突然目の前に転開する草原を見て、これを神々の苗所と考え、神聖視したのが現代に生きる自分にもわかる様な気がした。

元橋までの行程を考え苗場山を後にした。

山頂でだいぶ時間をつぶしたのでいそいで下る。途中、老夫婦に会つただけで、あとは赤湯までだれとも会わなかった。道は、はっきりしているので迷うことはない。赤湯は200円払うと風呂に入れてくれる。赤湯から林道までは上り下りがあり、大変疲れた。そして元橋の手前がこれまた200m 程の急登で、最後まで私のからだをしごく。さらに5分差でバスに乗り遅れ、疲労感が倍増した。しかたなく、売店でビールを飲みながら次のバスを待った。

橋本記

裏　妙　義

日程：S．52年11月13日

メンバー：大橋、喜古、部外者1名、

桐生（6：33）■■■（7：20）高崎（7：47）■■■（8：20）横川（8：30）——中尾橋（8：40）——（9：15）（9：25）——（9：55）丁須の頭（10：45）——赤岩手前（11：40）——赤岩通過（12：00）——最高点（12：25）——（13：00）——（14：10）入若宮橋——（15：00）横川（16：35）■■■17：14）高崎（17：36）■■■（18：30）桐生

予定通り横川に着く、見るからに凹凸があり楽しそうな山である。天気快晴。トンカチ形の丁須の頭、チムニ、七人星があり実に楽しい。景色も荒船方面の山が望め雄大であった。ただ最高点からの下りはよく解からず尾根づたいに下り、無事横川駅に着いた。この時列車が発車してしまい、次の列車まで時間に余裕があったので横川名物の釜めしを食った。山行後の釜めしは格別であった。

大橋記

瑞牆山～金峰山～国師岳

日程：昭和53年1月2日～4日

メンバー：陳、江川、橋本、北川、

1／2 ◎

桐生（5：31）▭▬▭（10：30）信濃川上（10：35）═══（11：10）瑞牆山荘手前——（11：50）——富士見平（12：15）——（1：15）瑞牆山山頂（1：30）——（14：20）富士見平（2：35）——（3：20）大日小屋 $\mathfrak{B}_1$

なだらかな冬の奥秩父に触れんとて行ってみたが雪山に非ず。瑞牆の頂に氷が薄く迎えるだけだった。その凍りついた路に尻で挨拶しながら、樹林と倒木と巨岩からなるこの山に立つ。

1／3 ◎→⊗

$\mathfrak{B}_1$（7：00）——（7：35）大日岩の10分先（7：50）—小休—（9：35）五丈岩（9：55）——（11：00）朝日岳山頂（11：10）——（11：55）大弛小屋 $\mathfrak{B}_2$

四時半起床。昨夜雪が少し降った。道々に雪が少しあるし、背中の装備も泣いているので、大日岩を少し過ぎてアイゼンをつける。樹林帯の中、小さな長靴をはいた児連れの父子とすれ違う。子白く、「パパ、あの人たちどこいくの。」ダブルヤッケと耳が熱い。五丈岩で昼メシ。

朝日岳を過ぎて、灰色の空から雪が降り出した。積雪も多くなり、大弛に着く頃には3・40cm程積もって、いつの間にか、かなり寒くなっている。C氏がずいぶん遅れてきた。小屋の入口の寒暖計は－15℃を指していた。

小屋番の五六十の男が寒いだろう、お茶でも飲むかと誘うのでついつい入いってしまう。ストーブにあたって熱く薄い茶をすする。おじさんの話は、昨日まで雪がなくって、この峠まで車がはいってて、こんな事あ、初めてだということだった。タダだと思ったら休憩料をとられた。

外は雪が降っている。陳さんの具合が悪いので、甲武信行きはやめにする。地固めもそこそこにエスパースにもぐり込む。

1／4 ①

$\mathfrak{B}_2$（6：30）——（7：00）北奥仙丈岳（7：15）——（7：25）国師岳（7：40）——（8：00）　（8：50）　小休　（10：40）営林署事業所（10：55）——（11：35）西股沢出合（11：40）——（12：50）秋山バス停（1：20）═══（1：45）信濃川上

朝陽の日、北奥仙丈と国師までピストンする。淡く強い朝焼けと、頬と鼻をそぐような風に、涙も垢も思考も吹き飛ばされて、痛みだけがこめかみからしみてくる。シャッターを切る指が切れるようだ。日陰はあらゆる熱と音と風とを青黒く吸い込んで動かず、たまに氷雪が紫銀に瞬くのみである。ヒュウウウと鳴るたびハイマツの鋭い葉先は細かく震え、冷たい岩の上の雪は、小さく渦まいて、光る飛沫となって消える。凜とした大気は、こう

して、素速く、寒風となり、静かに、雲と山をさえぎ、遥か遠くまで拡がっている。この素晴らしい自然に思わず、「ぐうう、きむう、橋本、ぼよ降りようよ。」

やがて一行は、薄雪をかぶったアイスバーンの舗装路にいやというほど、今度は、別れを告げて、ただただ奥秩父を後にした。

帰りの列車で非常食をつまみに小諸で買ったビンのビールはうまかった。　－北川記－

白毛門山～巻機山

期日：S 53年3月2日～4日

メンバー：陳、江川、

3月2日 ◐

桐生（6：33）═══土合（9：08）═══（15：10）白毛門山頂 $\mathfrak{B}_1$

土合には10人程降りたが、登山客は我々のみ。待合室で身仕度をし外に出る。風は強いが視界は良好で、トレースをたどって登り始める。直ぐに先行の単独登山者に追いつき、そこからは輪かんでのラッセルとなった。今日は朝日まで行く予定であったが、白毛門に着いたのが3時を過ぎていたので山頂に雪洞を掘る。

3月3日 ◎

$\mathfrak{B}_1$（6：30）═══（8：50）朝日岳 ═══（10：30）大鳥帽子山 ═══（11：45）檜倉山（14：30）柄沢山 ═══（16：10）米子の頭の下 $\mathfrak{B}_2$

起きた時は晴れていたが出発する頃は曇ってしまった。雪洞でアイゼンを着けて笠ヶ岳、朝日岳と順調に進む。柄沢の登りは東側に大きな雪庇が張り出している。西側をトラバース気味に進むのだが雪が深く腰まで潜ってしまうので輪かんを併用した。長い登りの柄沢山も越して、後はなだらかに米子の頭に続いているのだが、朝からの疲れでわずかの登りに一苦労する。米子の頭付近からは雪洞を掘る場所を探しながら歩き、結局米子の頭を少し降りた所に決定。今日は他の登山者とは会わなかった。

3月4日 ◐→◎→●

$\mathfrak{B}_2$（7：30）═══（9：45）巻機山 ═══ 桜坂（12：05）═══（12：45）清水 ═══（14：15）沢口═══六日町

西の空は曇り、東は青空、まぶしい太陽。午前中は陽に焼けそうだ。アイゼンを着け出発したがダンゴになって、2・3歩ごとにピッケルでひっぱたいた。1900m付近でアイゼンをはずす。9：45には今山行最後の山、巻機山に到着。紅茶を飲んで直ぐ下降を始めた。ニセ巻機を通過する頃よりガスがかかり、赤布とトレースに沿ってひたすら下る。下るに連

れガスは雨となった。シリセードの失敗で妙な所に降りてしまったが、スキーの跡をたどって米子沢の最下部を少し歩いた。駐車場で雨具を着け清水へ。清水からは除雪された車道を1時間沢口まで歩いた。(江川記)

谷川岳～白毛門（悪天のため途中下山）

日時：S 53年3月14日～17日

メンバー：C．L．新田（医）、S．L．江川、濁川（教）、猿谷（教）、木村、吉野（教）、太田、中村、陳、川上（教）、萩原（教）。

3月14日

土合（3：40）――（5：05）鉄塔上部――(11：35) 肩の小屋

小雪の舞っている中、指導センターから鉄塔までの急登はガチガチに凍っていた。Nのザックが壊れたが応急修理で先に進む。森林限界からは氷の上に30cm位の新雪（多い所は腰）があり、西黒沢側の雪庇に注意して歩こうとするが地風吹のため空と尾根の境界が極端に解りにくい。ザンゲ岩を越えてからはマチガ沢側の雪庇に注意する。肩の広場で下降時のために赤旗を2本使用した。視界が極端に悪い上、夜行の疲れもあるので今日は肩の小屋止まりとした。

3月15日

風雪強し、沈澱。昼頃、数人でトマの耳まで往復した。

3月16日

昨日と変わらず、風雪強し。6時より待機するが沈澱とする。今日はオキの耳まで行ってみた。

3月17日

肩の小屋（5：45）――（6：50）一の倉岳――(8：00) トマの耳――(9：50) ラクダの背――(11：10) 指導センター

天気は昨日、昨日と変わらず。視界も悪いが一の倉岳まで行き様子を見ることにした。オキの耳までは昨日歩いており、上州側に雪庇が張り出しているが、ブッシュに沿って歩いて行くと意外に早く一の倉岳に着いた。視界、天候とも悪いので先の縦走はあきらめ西黒尾根を引返すことに決定。14日に立てた赤旗まで降りたが先のルートがわからない。ザイルを着けてSが下降しルートを確かめた。ラクダの背を通過する頃、青空が見え始める。上部だけが風吹いているのだろうか。森林限界からは尻制動で滑り落ちた。(江川記)

谷川～平標（途中下山）

日程：昭和53年6月4日
メンバー：北川、真鍋、

記録なし。以下は忘れ難い記憶である。

私のパーティの新人強化合宿が早く終わったので、他のパーティに追いつこうと、すぐ後を追ったが、この頃山は、風が強く雪やみぞれまじりの雨が降る天気だった。乏しい食料の中から、ビスケットをほうばって土合を出発。早くも森林限界で、ハイマツのかげにもぐり込んで、「冷えるね。腹へった。」タバコがまずい。

風と大粒の雨の中、肩の小屋に飛びこむと、ストーブのまわりに先客が八人程、暖をとっていたり、まだ震えていたりした。紅茶を十分に飲んだら水がほとんどなくなったので、先が心配になってきた。コジキに変身する。スカーフを巻いた若い女性がおにぎりを捨てようとしたのを、真鍋氏はひきとめ、悟し、頂く。希望が涌いてきた。三四十分あちこち乾かして小屋を出る。先へ行くのは我々だけのようである。

五分も歩いたろうか、ふと、一の倉への道を歩いていることに気づく。互いに言い訳をしながらとってかえして、またひたすら歩く。オジカ沢の頭をすきても風は強く、時に烈しく、執拗な雨は冷たく重い。M氏のカッパは役に立たず、髪から滴が流れている。手が冷たい。

名実伴う避難小屋に着く。早速わずかばかりのメタで火をおこし、先程のおにぎりを分ける。アルミ箔をガシャガシャと開ける。冷たくなってはいるが何のその。さ～て中味は何かなと二つに割れば……臭い……糸をひいている……血の気がひいてくる。マジになってきた。万一の為に他の菓子類を非常食とすると残りはキューリのQちゃんだ。鍋で煮て食う。まだ震えが止まらない。M氏が、パックのリンゴジュースがあるんだとザックをのぞいたとたん、顔をクシャクシャにして何か叫んだ。つまみ上げた汚ないソックスからは淡黄色の液体がポタポタとたれていた。食い物はないかと、笹を敷きつめた小屋内を捜してみるが、熊のエサ以外に食えそうなのは何もなかった。ベグがやたらと落ちていたのでザックにしまう。少し前まで、アワてん坊がいたらしい。ガスも残り少ないようなので火を止め、私は水汲みに出る。めんどくさいので、ゴミ捨て場の下に流れていたのを汲み帰ったが、M氏のプライドがそこまではしたくないとダダをこねるので私のも屈した。火をつけ直すのにメタをほとんど使ってしまった。歯が耳にじかに響く。M氏はびしょぬれ、私も綿シャツが冷えている。セーターを忘れたのは痛い。交互に服を乾かしていると、男が一人、遅れてまた一人はいってきた。彼らは隅にいる小羊には目もくれず、食い物を交換して、するめを焼き始めた。その匂いを顔中で吸ったが、男に対しては、我々はプライドが高かった。

外は相変わらずである。一年生は苦労しているだろうな、心配だなどと言ってられな

くなってきた。途中下山を考える。万太郎に来た。西か北か。ためらいながらも吾策さんに従った。

３００Ｍも下ったろうか。振り返れば、はるか稜線は雲に隠れ、その境界はまさに別世界との境界線だった。小路の両側には、あちこちにシャクナゲが、白に、淡紅にと咲き誇っている。ここで食料をたいらげて先を急ぐ。しばらく行くと、路の真ん中にでっかい雲古がガマガエルの如く構えていた。こんなことするのは木村以外にいないとＭ氏。（本当は一年でした。）どうやら、みんなここを降りたようだ。分岐までまたペグを拾い集める。残雪を見つけてはグリセードをする。途中、沢へ向かって降りているグルセードの路があった。誰だろう。（ＳＯＭＥＯＮＥ　Ｉ　ＫＮＯＷ．）土樽に咲くかわいい我ＧＷＶの女の子を見て、また、プライドはぶっとんだ。「何か食うものをおくれ。」唯一人増田が汚ない恰好だったのを覚えている。　　ー北川記ー

越　後　三　山

日程：昭和５３年６月９日～11日

メンバー：江川幸和、古川孝司、

6／9　新前橋（1：21）▬▬小出（4：01）

6／10　◎→①

マイクロバスで枝折峠まで（5：00）。紅茶を飲みトコをぬり出発（5：53）。少し体調がおかしかったが、緊張感で感じられなくなった。2Ｐで小倉山（8：00）。途中㊌を探しながら歩いたが、飲める㊌が得られなかった。小倉山より駒の小屋の手前まで3Ｐ。小屋の手前にいい㊌が得られた。駒ヶ岳山頂（11：00）。駒より、八海山、中ノ岳、兎、平、荒沢、燧ヶ岳、巻機等が良く見える。雲行がおかしい。山頂出発（11：25）、3Ｐで中ノ岳の小屋（2：50）。中ノ岳の登りで太モモの内側がひきつりそうになり、最後のピッチはばてて、へとへとになり、中ノ岳の小屋に入る。小屋に10人ぐらいいた。雪を溶かし、㊌を作る。炊飯中居眠りし、ブスより火を吹く。ブスこわれ、御飯もしんありである。なんとか食えそうだが、これは朝食にまわす。　ロウソクでコンソメ、紅茶を作る。1時間もやってれば意外に出来る。就寝。

6／11　◎→●

起床（4：45）。お茶づけだけ食う。小屋出発（5：30）。約30分で御月山、それよりオカメノゾキまで下る。途中〝友はここに眠る。江川実〟というのがあった。江川氏気分悪そう。五竜岳（9：30）雨が降る。入道岳を通り越し、新道コースとの分岐よりす

こし行ったところより鎖がある。10m ぐらいの岩峰の登り下りに、岩稜に、鎖があり大日岳を降りた当りまでついている。千本檜小屋（11：35）。小屋に人多く、いるところなし。小屋出発（12：00）。池ノ峰を通り、大崎に下る。六日町駅（16：21）　　（古川記）

谷川岳

期間：6月29日～30日

メンバー：飯島（2W）、片所（部外者）、

6月29日

桐生（28日22：32）▬▬（3：05）土合――指導センター（4：00）――（8：45）肩の小屋（14：00）――（14：50）オジカ沢の頭避難小屋 ⚠

高崎で乗り換えたのでうまい具合に座ることができた。それでもあまり寝れずに土合駅に着いてしまった。駅を出ると小雨が降っていたが、とにかく登山センターへと足を進めた。センターに着くと雨はさらにひどくなり心配になって来た。センター内には雨のあがるのを待っている人がたくさんごろごろしていた。4時頃雨は小降りになったので何パーティーか出発し始める。我々もカッパを着て出発することにした。森林限界あたりで体の調子が悪くなり、休憩を多くとりながら進む。恐らく寝不足と寒さのためだろう。また雨が激しくなり、ようやく肩の小屋に飛び込むと、中はたくさんの登山者で、なかなかストーブにあたれない。ここで5時間程ねばり、その間に昼食をとり、ぬれたものを乾かし、体を暖めた。午後2時、ようやく雨もあがったので出発する。オジカの小屋に着いた頃には雲も薄くなり、ブロッケン現象が見られた。

6月30日

⚠（7：50）――（8：45）大障子小屋（9：05）――（9：55）万太郎山（10：30）（11：00）毛渡乗越（11：30）――（12：20）昼食（12：45）――（14：00）林道（15：55）川古温泉＝猿ヶ京＝後閑駅（17：43）▬▬桐生

朝は人の足音で目を覚した。もう7時近かった。あわてて準備をして出発。昨日とはうって変わって好天気であった。風邪をひいたためか調子がでないまま、ゆっくりと進む。大障子の小屋で水を取り万太郎へ着いたのは10時頃であった。俺の初めての山行を思い出す。あのときは平標山から入り、ここで下山したのだった。ここで30分程過ごし下り始める。日光きすげがいくつか咲き始めていたが、まだ少々早過ぎたようだ。毛渡乗越で、川古温泉への道標を見たら、もう登るのがいやになって、下山路へと足を向けた。初めは快適に下って行ったが、途中道がなくなり、一時ヤブこきもした。長い林道が終わり着いた川古温泉は、旅館一軒というひなびた所で、バスもなかった。仕方なく、旅館でタクシー

を呼んでもらって、バス停まで行った。

谷川岳北面西ゼン

期日：S 53年8月5日（夜）～8月6日
メンバー：C．L．橋本、S．L．古川、中村、太田、村田、江川、大和田（医）、

一昨年、昨年、そして今年、また西ゼンの白いスラブにやって来た。スラブ帯はルート経験者がリードしてくれるので快調であるが、滝の有る所では皆面白い所を登ろうとするので時間がかかったり、ヒヤリとしたり。第2スラブ最上部で先行パーティーの1人が滑落。幸い直ぐ止まり大事には到らなかったが、真下で見ていた我々はビビってしまう。スラブ帯の先の二俣は、左俣を登れば仙の倉と平標の鞍部にたいしたヤブこぎもなく出てしまう。快晴の空の下昼寝をした。下山路は平標小屋から平元新道を下る。（江川記）

足尾、仁田元沢

日時：昭和53年8月9日～8月10日
メンバー：C．L．橋本、S．L．村田、江川、本多、古川、

8／9　桐生（6：30）→（8：30）間藤→（10：50）ダム（11：00）→（11：50）F（12：15）→（13：10）分岐（13：20）→（14：10）

足尾線で終着間藤まで行く、間藤から渡瀬川に沿って行き、砂防ダムを過ぎると、渡瀬川には右に久蔵沢、真中に松木沢、そして左からは我々がこれから向う仁田元沢が注いでいる。仁田元沢に沿って林道を進むと、そこでは砂防ダムの建設工事が行われており、我々の行手をはばんだ。始め建設現場を右に高巻いて沢床に降りるつもりであったが、不可能なため、しかたなく建設中のダムにかかっている梯子を登らせてもらった。この砂防ダムが完成すると、この沢の遡行に大きな障害となるだろう。ダムを越え、沢床で地下足袋とわらじをつけた。しばらくゴーロ帯を行くと沢は左にほぼ直角に曲り、4m程のF となる。右の絶壁からは勢い良く水が落ちている。この辺になると周囲の山は樹木に覆われ、やっと自然の中にどっぷりつかった気分になった。F1通過後2、3の小滝が現われた。その後沢は、右に直角に折れ、ゴルジュ帯となる。沢の幅はぐっと狭くなる。各人、好きな所をへつりながら進む。急流で磨かれた花崗岩が実に美しい。ここら辺がこの沢の核心部だろう。ゴルジュ帯が終ると沢はふたたび左折し、小滝を越ると、ゆるやかな傾斜をもつ花崗岩の沢床を静かに水が流れ、回りからは樹木が迫り、樹間には苔むした石が点在して、日

本庭園を思わせる景色となった。しばらくすると沢は2つに分かれ、これを左に進む。このころから雨が降り出したのでビバークサイトを探しながら進んだ。天場では、ツエルトが1つのため、立枯れの木を集めて、即席の小屋を作り、3人がこれに寝、他はツエルトに寝たが、夜半より大雨となり、結局2人用のツエルトに5人が寝るはめになってしまった。

8／10 (7：50) → (8：50) 嶺線上 (9：05) → (10：00) 庚申山頂 (10：25) → (11：00) 庚申山荘 (11：30) →かじか荘→原向駅→桐生

昨夜は驚異的な状態で雨をしのいだため、ほとんど寝れなかったが、それ程眠気は感じられない。朝食後、遡行を開始する。しばらくすると沢はいくつもの枝沢を持つようになる。嶺線が近いことがわかる。水沢が尽きてからは、一面の笹原に巨木を配した幻想的な風景となり、各人悦に入っていた。嶺線上には獣道が縦横に走っており、登山道だと思って進むと、とんでもない所にいってしまう。小休後、庚申山に向って進むと、突然、ガサガサという音とともに我々の前を雌鹿が横切り、一同アッ然としてしまった、足尾山塊は、まだまだ動物の宝庫である。庚申山山頂までのヤブは、たいしたことはない。　(橋本記)

後立山連峰縦走

(日程) 8月20日～8月24日
(メンバー) 中村、古川、

8月20日～8月21日　晴れ

桐生駅□■□長岡駅■□■糸魚川駅□■□白馬駅═══猿倉 (7：30)── 村営白馬尻荘 (8：05)── 大雪渓 ── 白馬山荘 (1：00) ── 白馬岳山頂 (1：15)── 村営頂上宿舎 (2：00)

長い夜行列車にゆられながら白馬駅で降り、バスで猿倉まで行きここでお茶を飲みながら朝食をとり、さっそく歩き始めた。林道が終り白馬尻小屋を過きしばらくすると白馬大雪渓がガスの中に見えかくれしていた、そこにはかなりの登山者がいるようである。大雪渓中ガスで何も見ることはできなかったが雪渓を過き夏道に出合いしばらく登ると視界が開けた。ここからは急登が続いていやけがさしていると、お花畑のなごりがいやしてくれた。小雪渓を過き村営頂上宿舎につくと始めて白馬岳山頂が見えた、頂上における視界はなかなかよく、剣岳が迫力ある姿を見せている、しかし天候はくずれてきているようで雲は広がり風が強く、夏とは思えぬくらい寒かった。

8月22日・ガス後晴れ

村営頂上小屋（5：10）── 天狗山荘（8：10）── 唐松岳頂上（11：55）── 五竜山荘（2：35）β_2

昨夜から強風とガスと小雨である、あいかわらず寒い、カッパを着け唐松岳めざし歩き出す、視界もほとんどきかずただ歩くのみである。おかげでペースがよい。天狗の頭からの天狗の大下りは長い下りでいやになっていると不帰の峡に着き、ここからは鎖などもあり、又天候も回復して来て陽も出てきたため快適に登っていくと唐松岳山頂に着いた。東の方には長大な八方尾根が伸びておりまた南西には黒い剣岳がそびえていた。天場ではいぜん風が強い。

8月23日　晴れ

五竜山荘（5：10）── 五竜頂上（5：55）── 切戸（8：35）── 早月尾根（10：20）── 鹿島槍が岳（10：50）── 冷池山荘（12：15）── 爺が岳（14：00）── 種池山荘（14：20）── 天場（14：45）β_3

朝起きると風はやんでいた、昨夜の風がうそのようである、今日は眼前にそびえる五竜岳の登りから始まった、岩稜帯の登山道を登ると視界の開けた山頂に着いた、しかし昨日から登山者は白馬岳で見た人がうそのようにいなくなり、　静かな山行ができるのが嬉しかった。ここからの下降は慎重に下り、そのうちキレット小屋に着いた、よくこんな所へ小屋を作ったと思えるくらいすごい所へ建っていた。キレットは小さく鎖もついているのでなんなく通る。しばらくすると鹿島槍北壁が見え、これを見ながら北峰を過き、頂上に着いた、ここからの展望はすばらしく、立山連峰が眼前を立ちふさいでいる。遠くには、白馬岳、南には槍が岳も見える。今日は天気もよくのんびりとできたがめざす天場ははるか向うに見えガッカリする。

8月24日　晴れ後ガス時々雨

天場（5：47）── 新越乗越（7：10）── スバリ岳（10：05）── 針ノ木岳（10：50）── 針ノ木峠（11：25）── 扇沢（12：15）═══ 大町（15：22）

出発時は晴れていたのにいつのまにかガスが出て来た、時々剣岳が顔を見せる、向こうは天気がよさそうだった。初秋を思わせる木の実の赤い色や、紫色のトリカブトは感じがよかった。しかし赤沢岳に来ると小雨がパラツキ出して来た。スバリ岳付近において念願の黒部湖がガスの切れ間からのぞき二人とも思わず声を出す。これもつかのまガスと小雨の中針ノ木岳に着く、だいぶ早いペースである、これも天気のせいだろうか。予定では針ノ木峠で泊るつもりであったが、このころになると天候も回復し、南には烏帽子岳も見えてきたのでここから一気に下って帰ることにした、針ノ木大雪渓を下り扇沢へ行き、大町へ下山した。

（記中村）

北アルプス剣岳

○期間：昭和５３年８月２０～２６日

○メンバー：Ｃ．Ｌ．太田　稔、Ｓ．Ｌ．大和田良一(医)、江川幸和、北川昌基。

＝本番の岩登りは初めてのメンバーにより岩の殿堂剣岳に於てくりひろげられたあぶなっかしい登攀の記録＝

８月２１日　◎ガス

２０日に桐生、前橋をそれぞれ出発し２１日８：００Ａ．Ｍ．に室堂に到着。ここからはただ重い荷に耐えながら足元を見つめて別山めざして歩くのみ。いつもの事ながらＢ．Ｃ．までのアプローチはつらい。しかし別山乗越に着いたとたん眼前に広がったあの雄大な剣の姿は我々に活力をよみがえらせた。天場着２：００Ｐ．Ｍ．　７：００Ｐ．Ｍ．Ｇ．Ｎ．

８月２２日　○　＝源治郎尾根＝

５：３０Ａ．Ｍ．に赤く染った剣目指し出発。今日はまず足ならしと剣東面の概念をつかむために源治郎尾根をやってみる。夏だというのにここ剣沢には雪がいっぱいつまっていてその上早朝のためかかたい。その雪ケイをだましながら下って１時間程度で源治郎尾根の取付に到着。ザイルは使用せずに登り出す。まずはドロのつまった斜度のゆるいルンゼを少しつめる。すると３ｍほどのチムニーが表われるがザイルは使わず、ここにはハーケンが２～３枚打ってあった。それからはしばらくルンゼをつめるので景色は見えず日はあたらずでつまらない。早く稜線に出たい。一峰着９：１０Ａ．Ｍ．このあたりからは完全に視界がひらけ正面には剣南壁、右には八ッ峰、左には平蔵谷、はるか遠くには北アルプスの稜線が望まれる。１０：００Ａ．Ｍ．二峰手前で八ッ峰のクライマーを眺めながら昼メシ。２峰までは単調な岩稜歩きが続く。二峰の下りで始めてザイルを出す。距離２７ｍ程度。４０ｍザイル１本ではうまく支点にザイルをかけないとコルまでとどかない。我々は40ｍ２本でなんなく通過。ここから約１時間八ッ峰各壁をじっくりと観察しながら登る。11：45に山頂へ到着。12：15に別山尾根を下り３：10小屋に到着。今日はＭ．Ｏ．のひざの調子が悪く思いの外時間がかかった。

８月23日　○　＝源治郎二峰側壁＝

今日もＭ．Ｏ．はひざの調子が悪くＴ．Ｋ．３人を見送る。（雪ケイをつめて取付までのガレが急であった。取付にはハーケンがうってありすぐわかった。しばらく凹角を行きハイマツ帯に入るあたりからルートがはっきりしなくなったが右よりに登って行くと二峰のピークに出た。上部でまちがえたようだ。そこで二峰をアップで下り取付まで行ってこんどは右よりから登ったが今回もルートははっきりしない。今日は結局同一ルートを２度登

ったがすっきりしない。しかしもう時間切れとなったためもと来た道をグリセードで快調に下った。　江川）

8月24日　ガス　＝六峰Cフェース＝

今日は六峰Cフェースを登るつもりで基部までは来たがガスで取付もルートもはっきりしない。しかたなく基部と思われる付近でガスの晴れるのをまつ。2時間待っても晴れずしかたなしに天場にもどる。一日むだにしてしまった。

8月25日　○　＝六峰Cフェース＝

今日はいい天気になりそうだ。長治郎の長い雪ケイはかたくしまっているので慎重に登る。Cフェースの基部でアンザイレンする。オーダーは、江川、太田で剣稜会。大和田、北川でRCCルートを登る。剣稜会ルートの1ピッチ目はザイルはいらないほどの岩場である。4ピッチ目のリッヂは高度感もあり岩登りをしているという感じがこみ上げてくる。両パーティとも落ちずにCフェースの頭に4人の笑顔がそろった。（登攀時間2時間）ここで昼メシをとって八ッ峰通しに池の谷乗越まで行き、そこからは全員得意のグリセードで長治郎雪ケイを下る。所々クレバスが口をあけていた。4時には別山平に到着。あすはもう下山ということでビールを飲んだ。そのころ丁度剣は夕日で赤く染まっていた。

8月26日　○

チンネへも行く予定であったが日数がそれをゆるさなかった。また来るぞと剣に別れを告げ別山平をあとにする。このあぶなっかしい山行も無事終えることができた。

（文責：太田　稔）

ヒツゴー沢

日程：昭和53年9月3・4日

メンバー：江川、真鍋、橋本、

9／3桐生[redacted]水上→谷川温泉の先 🚌

9／4 🚌（6：00）→二俣（7：00）→ヒツゴー沢→肩ノ小屋（11：30）→厳剛新道→土合（15：25）

7月にオジカ沢を遡行した際、夜行の疲れが谷川岳の肩ノ小屋での休憩後、急激に現われ下山が大変であったので、その経験を生かし、今回は谷川温泉の先の東大寮手前にビバ

ークすることにした。水上駅に我々３人が降り立ったのは午後９時を過ぎ、観光地水上もすでににぎわいは無く、わずかの登山者と幾分の温泉客の話し声が静けさを増していた。駅前の食堂で鍋焼きうどんを食べた後、タクシーで谷川温泉まで行き、天場を捜し、早々に眠り込んだ。翌朝、登山者の驚きの会話が耳に入って来た。天気は？と見上げると、わずかに山にはガスがかかっていた。朝食後二俣に向う。睡眠は充分であるので足は軽い。二俣からヒツゴー沢出合までは道がついている。F_1手前でわらじをつけ、F_1に挑む。各人好きな様に登り始める。さすが９月の水は冷たく、シャワークライムなどする気が起こらない。この頃からガスは晴れてきた。ヒツゴー沢は小滝が連続しており、２、３度沢登りを経験した者であれば自由にコースが選べる。Ｅ氏は沢登りを始めて間も無い頃、この沢を遡行し、幾つもの小滝を越えることに感激したというが、オジカ沢の大滝を前にした後だけに、Ｅ氏も含め我々に幾分の物足りなさを感じさせた。ヒツゴー沢の中で１番注意したいのは上部のF_{17}である。それ程高くないチムニー状の滝で、左は逆層で、右は垂直に近く、ホールドが細かい。ＨとＥ氏は滝を直登ぎみに登り、シャワークライムを余儀なくさせられ、寒々とＭ氏を落口で待った。水の中に意外としっかりしたホールドがあった。Ｍ氏はシャワークライムを嫌い、微妙なバランスで右の壁を登った。F_{17}を越した後も小滝は続くが問題はない。しばらくすると水もきれ、腰程度のササヤブを進むと国境嶺線は間近であった。沢の端のしおれたニッコウキスゲが去りゆく夏と迎える秋を示していた。

記：橋本

浅間山雪上訓練

期間：昭和５３年１２月９日～１０日

山域：浅間山

メンバー：Ｃ．Ｌ．太田、Ｓ．Ｌ．古川、（工）村田、木村、橋本、喜古、本多、北川、江川、中村、（教）濁川、倉地、山田、斉藤、島田、武井、吉野、栗原、（医）高橋

○目的：今期冬山のためのトレーニング及び今回冬山に参加しない人にも積極的に雪上技術を身につけてもらう。

○日程：１２月９日$\mathcal{B}_1$ 浅間――小浅間の鞍部少し手前１６５０ｍ付近に全員集合。（１０：００）Ｇ．Ｎ．

１２月１０日 $\mathcal{B}_1$（７：００）――（８：４５）２２００ｍ付近にて練習開始――（１２：３０）終了――（１：２０）$\mathcal{B}_1$（２：００）――（２：２０）峰の茶屋にて全員解散。

○記録：１２月９日　○　風弱く暖かい

今年もあいかわらず雪が少なく天場付近での積雪は２～３cm程度である。明日の訓練がはたしてできるか不安であった。

１２月１０日　○→◎寒くはない。

集合した１９名を３パーティに分けて訓練を行うこととした。そのオーダーは次の通りである。１Ｐ：コーチ瀬川－古川、村田、橋本、高橋、栗原。２Ｐ：コーチ木村－倉地、喜古、山田、本多、北川、太田。３Ｐ：コーチ江川－斉藤、中村、島田、武井、吉野。２２００付近までは全員で行動を共にした。毎年多少なりとも雪のある北東斜面にも雪が少なく練習不能のため今まで利用したことのない２２００ｍ付近の道の上側斜面になんとか場所をみつけてパーティ別に分かれて練習をした。トレーニング内容は別紙の通りである。パーティ別トレーニングが終ったら全員で山頂へ向う予定であったが、天候も下り坂のように思われたのでトレーニングが終わりしだい下山した。今回は人数がかなり多かったので３パーティに分けてトレーニングを行ったが、コーチ１人に生徒５－６人はまだまだ十分な練習が出来ず冬山に於ては層が薄いと感ぜずにはいられなかった。

＝別紙内容＝

今回の山行に於て指導する氷雪技術

（於浅間山、５３．１２．９・１０）

１ⅰ）雪上登行－ゆるい斜面でピッケルアイゼンを使わずに雪面とのマサツによって歩く。（雪の性質を知る。）

ⅱ）雪上登行－キックステップ

ⅲ）雪上登行－トラバース

ⅳ）下降技術－雪面に対するバランス感覚を養う。（以上ピッケルアイゼンは使わず。

２ⅰ）アイゼンによる直登→斜登行→トラバース→方向転換→下降へと発展させる。（アイゼンフラット）

ⅱ）アイゼンに（出ッパを使用）

ⅲ）上のⅰ）ⅱ）にともなうピッケルの使用法。

※注）２に入る前に必ず滑落停止技術を身につけておくこと。

３ⅰ）雪上での確保。

ⅱ）ザイルフィックス方法、及びその利用法。

以上の事柄を確実に指導して下さい。

５３．１２．８

文責：太田

白　毛　門　（冬山のトレーニング）

日時：昭和53年12月17日～18日

メンバー：1ｐａｒｔｙ江川、高橋、喜古、栗原、2ｐａｒｔｙ吉野、橋本、濁川、中村、川上、3ｐａｒｔｙ太田、猿谷、北川、倉地、村田、古川、

12／17桐生→12／18（2：41）土合（5：20）→（7：18）山頂手前P（7：58）→（8：30）山頂（9：05）→土合→桐生

上州武尊山縦走

日時：S 53年12月28日～12月30日

メンバー：C．L．江川、S．L．太田、中村、北川、橋本、村田、喜古、古川、吉野（教）、武井（教）、猿谷（教）、川上（教）、栗原（教）、高橋（医）、倉地（医）

当初の計画は獅子が鼻山から武尊山への縦走であった。11月の下見の結果、この縦走は人数・力量の上からも困難と思われた。そこで一昨年経験した上の原からのコースとし、前回トラバースした剣が峰を直登することにした。この山行に当って12月に浅間山、白毛門山で全員が訓練を行なった。

○下見　獅子が鼻山～剣が峰山
11月21日～23日　江川、中村、黒沢、

獅子が鼻山付近稜線が細く、左右また前後に切れ、テント3張のスペースは無い。少人数でも雪の下のヤブに足を取られ時間を要するだろう。下見は大半がヤブ漕ぎ。獅子が鼻には固定ロープが残っていた。　（江川）

○下見　オリンピアスキー場～家の串
11月25・26日　北川、橋本、村田、喜古、古川。

下降路となるこのコースにはすでに赤布が点在していたので要所のみに赤布を着ける。剣が峰は現時点でも雪が付着して恐怖感を与えた。前武尊で伊勢崎山岳会の人達と会う。我々と同じく年末山行の下見とのことだった　（橋本）

本山行

12月28日　◎

桐生（6：33）▬▬（8：14）水上（9：36）═══（10：00）上の原山の家下 ——（13：50）避難小屋 $\mathcal{B}_1$

桐生で1名乗り遅れ、全員集まったのは水上駅だった。タクシーで山に向う。タクシーを捨て直ぐ歩き始めた。途中テントパーティーごとに昼食を摂った。尾根につき上げてからペースが早くなり簡単に小屋に着いた。トレースが残つているし、赤布もよく目についた。

12月29日　○→⊗

$\mathcal{B}_1$（6：30）——（8：35）武尊山頂（9：00）——（10：00）剣ヶ峰手前鞍部（10：30）——剣ヶ峰（13：15）——（13：55）前武尊手前鞍部 $\mathcal{B}_2$

明るくなるのを待って出発。快晴、登るにしたがい谷川方面がよく望まれる。頂上近くはさすがに風も強い。しかし太陽が見えるのだ。山頂での昼食後、先を急ぐ。トレースに沿って歩くので速さは夏と変らない。山頂より1時間で、剣ヶ峰手前鞍部に着いてしまった。好天を利用し剣ヶ峰を越えることにする。ザイルの使用は不慣れなため時間がかかる。しかし特別悪い箇所も無く、ワイワイ言いながら登ってしまった。午前中の太陽もどこへやら、雪が降り始めた。

12月30日　⊗

$\mathcal{B}_2$（7：30）——前武尊（8：00）——車道（10：00）——（10：40）オリンピアバス停（11：40）═══沼田

降雪は20cm位でトレースは消えていた。先頭はラッセルだが、後の方で輪かんがはずれるのでかなり離れてしまう。ペースは速い。1500m付近で全員集まり、スキー場の横を尻制動で降りた。凍った車道を1時間歩いた後、スキー場のロッジでビールとなった。

（江川　記）

谷川岳～白毛門山

日程：S 54年3月12日～14日

メンバー：新田（医）、江川、木村、

3月12日　○→◎

指導センター　（12：05）——森林限界（14：05）——（16：00）肩の小屋 $\mathcal{B}_1$

昨日は猿ヶ京温泉での医学部の追いコンに出席した。民宿を10時に出てN氏の車で土合に向かう。土合の駐車場で着換え山に入る。昨年より雪が少なく、トレースも残っている

が、コンパ明けのためか3人とも元気がない。年々、西黒尾根が長くなると、N氏ぼやくことしきり。森林限界の先でEが滑落したが大事には到らなかった。最後の急登を越え、なんとか4時に肩の小屋に到着。昨年の風吹に閉じ込められた3日間を思い出した。

3月13日　◎

ᴅ_1(5：50)―― 一の倉岳（7：00)――(10：00) 武能岳 ――(10：40) 蓬峠 ――(12：45) 清水峠ᴅ_2

起きると水上の街の灯が見える。アイゼンを着け出発。一の倉を過ぎるまで太陽が見えていたが、その後ガスの中となった。茂倉岳の下りで岩のコブを左に巻いた時、左に派生している支尾根に迷い込んだが、登り直し方向を定めて下降する。武能の下りは雪が少ないためか夏道がうっすらとわかる。蓬峠～清水峠は鉄塔が導いてくれるので安心だが、謙信尾根にも鉄塔が続いているので注意を要する。犬に迎えられ清水峠の避難小屋に入る。卒論の〆切りが明日とかで、K選手が騒いでいた。

3月14日　◎→○

ᴅ_2(6：10)――（8：40) 朝日岳（9：25)――(11：00) 白毛門山 ――(12：45) 土合

送電線の鉄塔を目指して登れば、ゆるやかな斜面となる。最低鞍部に着く頃はガスが晴れ、青空が現われた。朝日岳500mの登りは文字通り朝日を浴び、左に巻機、右に昨日歩いた武能・茂倉を望みながらぐんぐん高度をかせぐ。雪がもぐる所もあるが、3名とも思い思いの足ごしらえで登った。朝日岳で昼食を摂った後、くさり始めた雪に悩まされながら、土合まで歩いた。帰途、谷川温泉で温泉に入る。　（江川記）

その他の個人山行

昭和52年

○谷川岳～蓬峠　5．21　真鍋

○苗場山～赤倉山　6．11～6．12　江川

○浅草岳　7．9～7．10　真鍋、大橋、村田、

○大根下し沢・西ゼン　8．5～8．7　猿谷（教）、野上、江川、本多、大崎（教OB）➡「稜線」9号

○谷川南面の沢　8．19～8．21　陳

○北鎌尾根～笠ヶ岳　8．16～8．20　江川、濁川（教）➡「稜線」9号
○西黒尾根往復　12．10～12．11　北川、橋本、江川、大崎（教OB）➡「稜線」9号
○浅間山　12．17～12．18　北川、橋本、太田、中村、他➡「稜線」9号
○南八ヶ岳　12．26～12．30　陳、木村、江川、橋本、中村、太田、他➡「稜線」9号

昭和53年

○赤城山　2．27　江川、
○赤城山　3．11～3．12　江川、橋本、
○榛名山黒岩　5．21　根岸、江川、猿谷（教）他
○谷川岳　6．18　古川、
○谷川岳～蓬峠（指導標ぬりかえ）7．11～7．13　村田、井上、北川、
○谷川南面オジカ沢　7．16　真鍋、江川、橋本、
○榛名山黒岩　11．21　太田、中村、
○谷川岳往復　11．26　江川、高橋（医）、

※「稜線」は群馬大学教育学部ワンゲルの部報

「冬山の規約」（昭52年12月8日）

三学部の許可を必要とする山行（原案）

Ⅰ．期間及び山域
○12～3月までとする。※11月のアルプス、谷川上越以北の山の縦走は含む。
○期間中（12～3月）西上州、雪の無い山を除く。
○縦走以外の山行に関しては各学部に任せる。
Ⅱ．単独行は禁止。
Ⅲ．提出期限
○山行届（コース、日程、メンバー）を1週間前に各学部へ提出する。
※計画の概要でいいから、かなり前から他の学部へ連絡をとるようにする。

尚、意見がありましたら執行部まで。

52年以前の記録（合宿のみ）

工学部　新人強化合宿　白根隊

昭和五十年五月三日～五日

メンバー：Ｃ．Ｌ．金子、Ｓ．Ｌ．大塩、武井、陳、永島、河内、小林、竹之内、

雨こそ降ってはいなかったが今にも泣き出しそうな天気のなか、３日朝桐生を出発した。湯元まではバスで入り、念入りな準備体操のあと前白根をめざして行動を開始した。白根沢より少し北に行った地点で道からはなれ、雪におおわれた斜面を登り始めた。好調とはいえないまでも順調に高度をかせいでいったが、それまでベソをかいていた空がついに泣き出し、止むなくその日の行動を断念、稜線まであとわずかというところでテントを張った。

翌日、天候は回復したが、計画に余裕がなかったこともあって計画を変更、ひとまず湯元まで下りることとした。湯元までは白根沢をたどり、湯滝、小田田代を通って中禅寺湖南岸を歩いた。そして夕方には阿世潟に到着し、そこのキャンプ場で一夜を過ごした。

５日も一日中よく晴れた天気となり、阿世潟峠を越えて足尾に抜けることにした。峠を越えると沢との出合いで昼食とした。あとは足尾名物の林道歩きを残すのみである。いつものことながらまったくおもしろくないことではあるが、それでもとにかく間藤の駅までがんばり、無事今回の山行を終了した。

しかしながら今回は山らしい山には登っておらず、不本意な合宿であった。

１９７５年度　秋合宿縦走隊

野反湖～白砂～苗場～小松原

今回の秋合宿は雨と思ったより道が不鮮明であったため、予定の半分の苗場平前の赤倉山から赤湯へと下山の止むなきに至った。私としては、初めてのＣＬで雨の中のヤブコギ、陽が落ちてからの道捜し、台風が直撃するかもしれぬという恐れで、良いリーダー養成合宿となったようだ。晴れたのは３日と５日の２日間であったが、５日目は赤湯からの下山だけである。行く前から雨が降ることは予想されたが、区切られた秋休みだけに残りの３日間は雨の中を歩いた。全般に雨の中のヤブコギはつらいが、テントの中へ入ればなごやかであり、良い山行であったと思う。尚、予定では桜井さん（３Ｃ）と荒川さん（３Ｐ）が一緒に行くはずであったが行けなくなり、島田さん（３Ｅ）、河内さん（３Ｃ）、市川さん（２Ｓ）、安達（２Ｋ）と私吉野（２Ｌ）の５人となった。また、クラブ全体として出発日を10月１日から２日に変更した。

9月30日（火）　P．M．1：00　装備点検、買出し。

10月2日（木）　曇りのち雨。

桐生（6：33）▬▬新前橋（7：31）▬▬長野原（8：55）═══バス═══花敷温泉口═══野反湖═══ハンノキ決（11：00）β_1

雨が降るのは覚悟で全員花敷温泉口までやってきて、これから約3時間半の林道を野反湖まで元気で、とは言えないが行こうとする時、地元のおばさんから野反湖まで行くトラックがあるからと声をかけられ、ここは一番CL判断で乗せてもらうことに決定。荷台の寒さといったらものすごい。お礼をと思ったが受け取ってもらえず、また御名前も聞かず失敗であった。野反湖から歩いて15分、初日の天場である。林道をトラックで1時間たらずで来たために、11時過ぎに天場に着き、午後はゆっくりとトランプ。

10月3日（金）　雨

β_1（6：15）——地蔵峠分岐（6：45）——堂岩山（9：00）——白砂前最低コル（10：00）——白砂山頂（10：45）——（11：30）β_2

4：25起床。天場から25分登った所に営林署が使っていたと思われる小屋があり、そこから少しして地蔵峠分岐へ出た。お地蔵さんがいた。堂岩山から白砂山頂までは道も鮮明な道。しかし堂岩山までは木が茂り視界は良くなく倒木が多い。しかしそれからはもみじがきれいでとてもすばらしい。途中小さなピークが多い。白砂手前コルのすぐ下に池塘があり、降り始めていた雨が強くなったのでそこにテントをはろうかという意見が出たが、もう少し前進することに決めた。白砂山頂で群大のプレートを発見し、そこで雨の中、寒さに震えながら昼食をとった。上の間山との分岐ははっきりせず、苗場へ行く道のほうが笹が深い。このころから道が不鮮明となってきた。白砂を下った所に池塘があり、わかしたその水が飲めると判断しそこにテントをはる。今夜はカレー。天気予報では、前線が朝鮮半島中国地方、紀伊、房総沖と続き、明日も天気は良きそうになかった。

10月4日（土）　晴れ

β_2（6：30）——沖の西沢の頭（9：35）——赤土居山（10：47）——佐武流山（1：00）——和山分岐（5：10）β_3

4：15起床。起きてみると昨日来の風で雲が流され、オリオン、シリウスが光っている。これはすばらしい紅葉が今日は観られると、皆大はしゃぎ。歩き出して30分も行くと道が不鮮明となり、時々ヤブコギ。白砂を返りみるとすばらしい紅葉。白砂からの下り、最低コルに6テン1張りくらいの場所があった。　沖の西沢の頭から赤土居山まで途中ヤブコギも含むがほっと尾根づたいの道に出て、秋空と紅葉とそして右側のガレ場に目をやりながら山歩きを満喫。しかし佐武流から1時間半ほど下った所で西側へ下り過ぎ、尾根を失いかけ、今度は東側へ沢を下りそうになり、ずっとヤブコギ。4時に天気図を書いた後、

なんとか尾根に出てそのまま下り、天場へ着いた。途中の赤布、ナタ目、プレート（新潟県境一周年記念）のありがたさ、大切さは身にしみた。水場は天場より下り３分、水量チョロチョロ。天気予報では台風が接近し、翌々日６日には日本に上陸するかもしれないといい、天気は再び悪化するという事であった。そこで昨日、今日と予定の１日分を２日で歩いたこともあり、赤倉からまず人のいる赤湯へ下ることに決定した。

10月５日（日）　雨

ᴅ_3（７：26）―― 赤倉山（11：48）―― 赤湯（14：25）ᴅ_4

台風が来るということで下山と決定したが、昨日遅くまで歩いたので５：15起床。初めは道も良かったが、雨が降り始めてきたころヤブコギが始まり今日も悪戦苦闘。ここも新潟県境一周記念（日本山岳会新潟支部）のプレートが続いており、赤布と共に大きな道標となってくれた。１番迷ったのは赤倉山手前で、なんとか赤布、踏み跡を捜そうと雨の中を30分近く全員で捜し回った。もしそのまま道らしきものが見つからず、ずっと雨の中のヤブコギであったら赤湯への分岐へももしかして出られないのではないかと、内心恐かった。しかしなんとか赤布と道らしきものを北西方向に見つけ、その道が正しいと判断し赤倉頂上へ着いた。そこでこの日も雨にうたれて、冷たい昼食をとり、急いで赤湯へと下った。赤湯では６テン２張り程度の天場があり、露天風呂があった。皆びしょびしょになってはいたが、気力なく、ラジウスで体を暖めた。台風は通過する模様であった。

10月６日（月）　晴れ

ᴅ_4（８：20）―― 棒沢出合い（９：30）―― 林道（９：50）═══元橋（12：50）═══ バス ═══ 湯沢 ▬▭ 桐生

台風が駆け足で太平洋を抜けてくれたので朝はまだ曇っていたが、台風一過の秋晴れであった。棒沢出合いの橋の下に釜段の滝がありみごとな水量を中に踊らせていた。11時半頃沢でラーメンを食べて元橋へ向かった。元橋への最後の登りがきつかった。記市川（ＳＬ）

’７６　春山スキー合宿（尾瀬）

昭和51年３月21日～28日

メンバー：Ｃ．Ｌ．大塩、Ｓ．Ｌ．小林、生出、島田、吉野、市川、武井、永島、梅山（医）、大崎（教）、滝、猿谷（教）、

３月21日　⊗

桐生（６：33）▬▭▭（７：54）沼田（８：04）═══（10：00）大清水（10：30）――（12：20）一の瀬 ᴅ

3月22日 ⊗→◐

一の瀬（8：55）――（11：40）三平峠（12：30）――（13：15）長蔵小屋

3月23日 ◐→⊗

沼山峠へ全員でスキーに出かける。

小屋（8：05）――（9：20）滑降開始地点（11：40）――（12：35）小屋

3月24日 ⊗

沈殿（武井、永島、下山）

3月25日 ◐

燧ヶ岳へ全員でスキーに出かける。

小屋（7：35）――（11：05）スキーデポ（11：20）――（11：35）山頂スキーデポ地（12：35）――（15：05）小屋

3月26日 ◎

沈殿

3月27日 ●→◎

沈殿（下山予定日であったが下山中止）

3月28日 ◐

小屋――三平峠――大清水＝沼田▬▬桐生

3月21日

沼田駅よりチャーターしておいたマイクロバス（戸倉、旅館「きんりゅう」）で大清水まで行った。長蔵小屋まで入る予定であったが天候は下り坂、時間的にも無理と判断、一の瀬に泊まることにした。

3月22日

昨日から降り続いていた雪が25cm程積っていた。出発予定時間になっても雪は多少強く降り続いていたため、しばらく様子を見ることにした。その後雪も小降りになり時折青空が見え出し、意気揚揚と出発!! 三平峠までは昨日からの積雪で膝以上のラッセルを強いられる。三平峠に着く頃は天候は回復し、燧ヶ岳の雄姿が見え、ラッセルに疲れた我々をなぐさめてくれた。ここから沼まで重いザックを背負っての大滑降である。先発、後発隊に分けて小屋に向う。先発隊は、小屋の掘り出し作業に汗を流す。尾瀬の積雪は去年より1m程少なく2m20cmであった。その為、トイレ、水は長蔵小屋まで行かずに、トイレは夏使用している所を使い、水は沢を利用できた。水量は豊富であった。

3月23日

予定通り沼山峠へスキーに出かける。

燧をバックに一人づつ記念写真を写す。

数回滑った後、ゲレンデを作り豪快にスキーを飛ばす。N氏豪快にひっくり返ってねん

ざをしたようである。

3月24日

昨夜からの雪が降り続いていたため今日は沈殿日となる。武井、永島両氏が下山、Y氏、U氏、T、S各氏が見送る。

3月25日

朝から晴れ絶好の登山日和りである。昨日長蔵小屋のツアーのパーティーが燧に登ったため、ラッセルの必要もなく楽に行けた。コルにスキーをデポして山頂に向う。コルからは新雪の上の大滑降である。恐る恐る滑って下る者もいたが、飛ばしすぎて雪まみれになって下る者それぞれであったが、全員無事小屋に到着。下る途中、スキートラブルがあり苦労して滑った者がいたが、スキーは山に入る前に整備しておいて欲しいものである。

3月26日

天候は悪く、沈殿となる。

朝からギャンブルに花を咲かせた。

3月27日

朝から雨が強く降っていたため下山中止。午後から雨も上がり曇り空となる。長蔵小屋の越冬隊の人と近くのゲレンデにて回転競技を行なった。1、2位は越冬隊、3位にU氏が入った。下山中止で沈んでいた我々にとって心をなごませてくれた競技会であった。夜は参加賞で最後の晩さん会を行なう。

3月28日

三平峠で時間に相当の余裕があったので、スキーで遊ぶ。昨日の競技会の興奮がさめないためか、最後には、ストックを立てて時間を計り、大回転大会を行なった。三平峠からは全員スキーで下り途中1回小休をとり一の瀬へ出る。30分程で大清水に着く。予定時間より1時間も早くマイクロバスが迎えに来てくれた。　　(大塩茂夫記)

部　員　住　所　録

1981年1月現在			現住所・帰省先	TEL
野上達哉	院C 2	〒376	桐生市菱町黒川２２４７	
		〒229	神奈川県相模原市鶴間８－11－２	
江川幸和	4S	〒376	桐生市菱町黒川２３５１－５辰美荘	44－4055小林方
		〒649－64	和歌山県那賀郡打田町下井阪	073677－3516
北川昌基	M研	〒376	桐生市天神町３－14－45　啓真寮	22－9828
		〒308	茨城県下館市稲荷県丙150	02962－２－3906
橋本　勇	4L	〒376	桐生市天神町３－14－45　啓真寮	22－9828
		〒350	埼玉県川越市古谷上4307	0492－35－4578
本多偉知朗	院P 1	〒370－05	邑楽郡大泉町下小泉1939－46	0276－62－3845
			同上	
村田　進	4M	〒376	桐生市永楽町７－13川辺方	
			埼玉県行田市矢場２－２－４	0485－56－4003
太田　稔	4J	〒376	桐生市菱町黒川２３５１－５辰美荘	44－4055（小林）
		〒136	東京都江東区東砂１－６－15	03－645－1332
中村雅秋	4P	〒376	桐生市菱町黒川２３５８葉月荘	43－8521
			渋川市金井南町９６０－５	02792－３－6289
飯島宏さ	4W	〒376	桐生市新宿１－１３－２９	44－0377
			同上	
井上祐治	4M	〒376	桐生市菱町黒川普門寺	
		〒370－16	多野郡吉井町川内１８４	02738－７－7753
井ノ瀬純	4C	〒376	桐生市菱町黒川２３５１糸井方	
		〒370－35	群馬郡金古１１８２－３	02737－３－0869

黒沢　浩	4S	〒376	桐生市菱町黒川２３５１糸井方	
		〒366－01	埼玉県深谷市矢島７６２	0485－71－0764
根岸和美	4L	〒372	伊勢崎市稲荷町４６９－２	0270－24－2255
			同上	
関口満雄	4M	〒370－07	邑楽郡明和村下江黒２７１	02767－４－5483
			同上	
古川孝司	4W	〒376	桐生市西久方町１－５－30	22－9770
		〒521	滋賀県坂田郡米原町磯１８７８	07495－２－2459
浅香多喜夫	3K	〒376	桐生市菱町黒川２３５９藤崎方	45－2989
		〒370－16	多野郡上野村大字新羽３９６－１	027459－2264
斎藤　究	3M	〒376	桐生市平井町４－２１青葉荘	22－2535
		〒371	前橋市朝倉町４－６－２２	0272－63－3251
芦沢敏之	3C	〒376	桐生市東久方町２－３－１２	47－4368
		〒367	埼玉県本庄市銀座３－６－３	0495－21－8550
山田　靖	3M	〒376	桐生市平井町４－15杉戸方	22－5672
		〒330	埼玉県大宮市別所町１０００－８０	0486－64－2680
増田光男	3M	〒329－44	栃木県下都賀郡岩舟町静１３５６－２	02825－５－1664
			同上	
佐藤正幸	3E	〒376	桐生市西久方町１－５－３０井藤方	22－3393
		〒370－24	富岡市宇田５４３	02746－３－1339
太田直宏	2K	〒376	桐生市西久方町１－３－30	22－2894
		〒430	静岡県浜松市中沢町３４－２	0534－71－0055
星野和弘	2W	〒376－03	勢多郡東村大字小夜戸４９１	027797－3507
			同上	

堀尾直史	2S	〒376	桐生市東5丁目11－6学伸寮	47－4486
		〒446	愛知県安城市大岡町前畑22－1	05667－6－8343
大東浩司	2S	〒376	桐生市相生町3－190	
		〒523	滋賀県近江八幡市野村町748	07483－6－6159
鵜崎和美	2M	〒327－01	栃木県佐野市赤見町4178	0283－5－0548
			同上	
若田部純一	2A	〒376	桐生市東2－3－36	43－0300
			同上	
増子　隆	2M	〒371	前橋市本町1－13－13	0272－21－4041
		〒311－42	茨城県水戸市岩根町990	0292－29－7271

O　B　住　所　録

氏名	卒業年・科	勤務先・住所	TEL
宇多川　紘	40E	日本サーボ（株）	
		不明	
岩下佳司	41W	日清紡（株）	
		〒350川越市脇田本町21－7	0492－44－9399
新井靖衛	41C	東洋パルプ（株）	
		〒737－01呉市広町東小坪18060－24	0823－72－7986
浅海瑛二	41S	不明	
鳥居寛治郎	41M	千野製作所（株）	02737－4－1249
		〒370－33群馬郡榛名町下室田甲942－2	〃－4－1404

見供滋忠	41M	三菱油化（株） 〒510 三重県四日市市小古曽４－５三菱油化社宅	0593－45－4825
鳩原恵二	41E	不明	
藤村孝道	42S	モーリン化学（株） 〒329－42　足利市駒場町７７０	0284－91－1747
内田邦夫	42M	神戸製鋼所（株） 〒673 明石市沢野１丁目１７－１３	078－927－1207
朝倉正博	42E	芝浦電子製作所（株） 〒338 浦和市町谷５１０芝浦電子社宅	0488－54－5264
大塚光守	42E	東芝電気器具（株）前橋工場 〒371 前橋市古市町東芝電気器具寮	
鹿山　公	42S	興国化学工業（株） 〒373 太田市竜舞町２０７０	
小林弘一	42C	明成商会（株）東京営業所 〒362　上尾市錦町２－１２	
深沢　鼎	42教	渋川高校定時制 〒371－02勢多郡粕川村前皆戸１４	027285－3660
川田祐一	43W	堀田産業（株） 〒326 足利市元学町８２３	
小島　昭	43S	群馬工業高等専門学校工業化学科 〒376 桐生市本町４丁目３３８	0277－22－7055
横尾国夫	43M	横尾製作所（株） 〒322－03鹿沼市西沢町３８８	0289－77－2264

金子岩男	43K	日東製粉（株） 〒３４０草加市栄町松原団地Ｂ－４６－７	
五十嵐信之	43K	東洋インキ製造（株） 〒３３６浦和市南浦和公園住宅４２－５０１	
久保田耕司	43K	東芝セラミック（株） 不明	
藤井幸吉	43M	ソニー（株） 〒259－11伊勢原市高森５－５－３０２	0463－94－6998
斎藤　譲	44S	群馬県土木部下水道科 〒３７１前橋市岩神町３－４－９	
原　文雄	44K	日本酸素（株） 〒３６７本庄市北堀１４７９	0495－22－6818
江黒　茂	44M	東武鉄道（株） 〒３６０熊谷市本石１丁目３００	
横山崇雄	44C	倉敷紡績（株） 〒５１４津市大谷町３２－１１	0592－28－6144
小沢達樹	44W	群馬県工業試験所 〒３７１前橋市小相木町４８８－１	0272－51－6524
松田衛次	45L	不明 〒３７３太田市内ヶ島１５７４	0276－45－5299
草場　彰	45院E	日立製作所（株）戸塚工場 〒２４４横浜市戸塚区戸塚１０１３－５	045－861－4764
中島好司	45S	日本楽器（株） 〒４３０浜松市中沢町７－５日本楽器清韻寮	72－4270

加藤芳彦　45W　不明
〒１２３東京都足立区西新井栄町１－16－２－３

山田定男　45M　古河アルミニウム（株）日光工場
〒321－14日光市清滝丹勢町６１０－５９　0288－３－1760

上山　悟　45K　大気社（株）
〒156 東京都世田谷区経堂５－２８－２０　03－426－2789

埋橋文人　45M　日立製作所（株）
〒２４４横浜市戸塚区舞岡町８５０恒心寮

根岸秀幸　45M　ソニー（株）
〒１３５東京都江東区東陽４－12－20－1213

須藤　誠　45E　富士通（株）
不明

中島恒弥　45E　三菱電機（株）
〒６１６京都市右京区嵯峨二尊院門前往生院町６　861－3589

木村隆男　45院C　電々公社
〒311－41水戸市赤塚町２０９０電々水戸赤塚独身寮

岡部宣男　45S　足利学園高等学校
〒326－01足利市板倉町８００

斎藤勝男　45M　群馬大学工学部
〒３７６桐生市天神町１－６－４６　0277－22－2959

滝野哲司　46C　沖電気（株）
不明

高橋撤夫　46P　クラレ（株）
〒７９３愛媛県西条市朔日市８０１－１クラレアパート７号
08975－５－4896

堀江英雄	46L	不明
宮川英雄	46W	不明 〒２８０千葉市高洲２－５－９－３０２　0472－44－8335
大橋　進	46W	不明
鳥居寿一	46P	出光興産（株） 〒２４６横浜市瀬谷区阿久和田３６６２
河野政美	46P	昭和ゴム（株） 〒２７７柏市酒井根５５１－５４
五十嵐和男	46W	トヨタ自動車工業（株） 〒441－03愛知県宝飯郡御津町赤根氷神１１－１
吉野栄二	46C	出光興産（株） 〒２１３川崎市高津区宮前平３－２－４宮前台マンション１０１号
浅見武義	46L	日本ビクター（株） 不明
太田　博	47L	タケダ理研工業（株） 〒350－02入間郡鶴ヶ島町富士見３－17－１０１　0492－86－6108
斎藤　功	47M	大和設備工事（株） 〒３７５藤岡市東平井１２６５－３　02742－３－5794
広田雅司	47院W	不明

山口昌男	48M	日立機電工業（株） 〒３２６足利市八幡町１２４	0284－72－6765
鎌田篤夫	48M	足利工業大学附属高校 〒327－01佐野市出流原町９９１	0283－５－0290
小高秀一	48E	三菱電機（株）群馬製作所 〒３７３太田市熊野町２５－１０三菱電機桃ヶ丘社宅	0276－25－6173
海老原孝司	48E	近畿電気工事（株） 〒２８１千葉市稲毛東５－９－１０	0472－47－1713
長谷健二	48E	フジマル工業（株） 〒２２８座間市入谷２丁目１３５－２４	
川崎喜孝	49M	五洋建設（株） 〒272－01市川市千鳥町１４五洋建設市川器材センター	0473－58－2481
品田忠保	49K	三井三池製作所（株） 〒328－03栃木市田村町１０８０三井田村寮３－１３	0282－27－4976
海老沼義郎	49K	大気社（株） 〒３３０大宮市大和田町２－５１１	0486－86－1283
熊田武夫	49K	クノール食品（株）長野出張所 〒３８６上田市常田２丁目１９－２９池野アパート	0268－27－5352
山口　明	49K	興国化学工業（株） 〒３２６足利市本城２丁目１７８９	0284－41－7963 0847
柴野真知子 （旧姓：加藤）	50C	不明 〒３７３太田市飯塚１００１－６	0276－46－5668
大前寛美	50S	不明 〒079－13北海道芦別市上芦別町５４２	01242－２－4173

渡辺　等	50M	高周波熱練（株） 〒２５３茅ヶ崎市浜須賀７－４７
高橋茂雄	50M	高崎製紙（株） 〒３４０草加市青柳町４１４０
小林　茂	50M	日産自動車（株） 〒２２１横浜市神奈川区西寺尾７１４日産西寺尾寮A－３３０ 045－433－2355
大島茂雄	50M	電々公社 〒３７１前橋市文京町４丁目１－１０　0272－21－9306
須永　守	51M	三共電器（株） 〒373－01太田市大字成塚６７４　0276－37－1525
綱川　猛	51P	関東サーモ（株） 〒３７６桐生市新宿通り１丁目４３２　0277－44－9042
武井　昇	51院W	職業訓練大学校 〒２２９相模原市西橋本１－１４－３２訓大橋本宿舎１－15 0427－71－6988
池上　栄	52E	太陽電気（株） 〒３７１前橋市川原町３７５－　７０　0272－31－4219
島田文雄	52E	日本電気（株） 〒２１１川崎市中原区下沼部１９５９日本電気日新寮 044－411－5648
生出　広	52J	三栄測器（株） 〒321－02栃木県下都賀郡壬生町安塚８７７－８２篠原アパート 10号棟　0282－86－5030
浦野克美 （旧姓：桜井）	52C	日本抗体研究所（株） 〒379－01安中市東上磯部１６５１　0273－85－4361
荒川法子	52P	栃木精工（株） 〒３２８栃木市室町８－３　0282－22－0403

大塩茂夫	52P	浪花屋製菓（株） 〒949－54新潟県三島郡越路町来迎寺	02589－２－2863
河内秀夫	52C	かわち文具（株） 〒３７６桐生市本町５－６２	0277－47－2246
馬坂達男	52院P	太陽誘電（株） 〒370－33群馬郡榛名町下室田８００－３太陽荘	02737－４－0214
小林一郎	53L	日立メディコ（株） 〒270－11我孫子市並木６－４－28並木荘10号	
吉野博文	53L	リコー（株） 〒１４２東京都品川区二葉町４丁目３－１９	
陳　親博	53院L	日本データゼネラル（株） 〒３２６足利市栄町１丁目３３６０	0284－21－7962
永島孝作	53院P	四国製紙（株） 〒360－01熊谷市村岡６７９－１四国製紙第２アパート１０２	0485－36－5141
木村博志	54W	平岡織染（株） 〒３４０草加市松江町７０３平岡織染単身寮	
真鍋忠男	54C	教員志望 〒969－62福島県大沼郡会津高田町大字杉屋	
滝　裕徳	54S	東海アセチレン（株） 〒４２４静岡県清水市袖師町宇江川田１２５２－９	0545－64－9404
喜古寿一	55W	市田ＫＫ 〒１２０東京都足立区綾瀬２－８－１	03－602－0037
大橋　忠	55C	泰栄商工 〒311－02茨城県那珂郡那珂町向山1279－67	02929－８－5746

土山龍司	55M	埼玉大学大学院 〒338 浦和市下木崎773	0488－31－9327
新里　均	55E	自営業 〒904－12沖縄県国頭郡金武村金武996	098968－3860

編　集　後　記

中身の方はともかく「皇海」９号いよいよ活字になります。入部当時は、山行の後に記録を書く習慣が全く無かったため、いざ発行しようという段になってから記録を集めるという有様でした。

また、昭和50、51年度の記録は大半が未提出のため、部室に残っていた記録のみ巻末に収録する形になりました。

無理な注文も、快く引き受けてくれたＳ、Ｍ、Ｏ、Ｎ、Ｈ、Ｋ君御苦労さまでした。そして、ＯＢの皆様、多大なカンパありがとうございました。

さて、そろそろ10号の係と交代の時間です。　（Ｅ）

皇海 9号　（昭和52～53年）

発行日　１９８１年３月

発行　群馬大学工学部
ワンダーフォーゲル部
〒376 桐生市天神町1－5－1

印刷所　群馬印刷所